第四部　聞き書きメモ

第五福龍丸は三崎の船だった

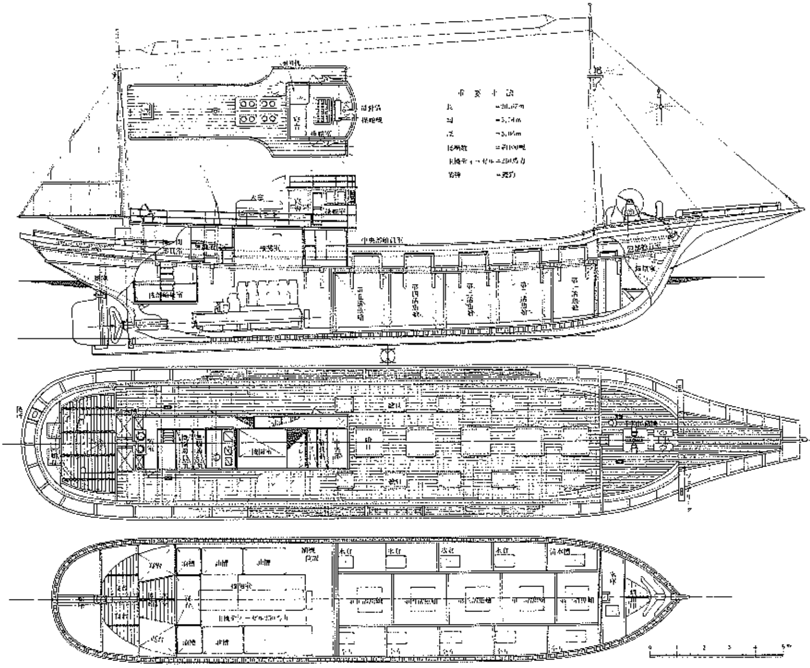
第五福龍丸は三崎の事代漁業株式会社が当初、カツオ漁船第七事代丸として造った船だった。この第七事代丸が第五福龍丸となるいきさつについて、財団法人文化財建造物保存技術協会が平成元年三月に刊行した「第五福竜丸保存工事報告書」に次のように記されている。

『第五福竜丸の誕生とその背景

太平洋戦争の終戦まもない昭和二十二年七月和歌山県東平姿郡古座町（現東牟婁郡古座町）の古座造船所で一艘の木造かつお漁船が進水した。船の注文主は神奈川県三浦郡三崎町（現三浦市三崎）の寺本正市氏である。この船は「第七事代丸」と命名された。これがのちの「第五福竜丸」である。

（中略）

神奈川県三崎港がまぐろ漁業の主要な根拠地として形成されたのは大正十年から昭和初期にかけてで、その先駆的な役割を果したのは古くからかつお・まぐろ漁業に従ってきた徳島・三重・和歌山方面からの漁民移住によるものである。これは漁場が近く、かつ大消費地の東京に近いなどの好条件によるもので、昭和三十年代には日本最大の漁業基地として有名になる。

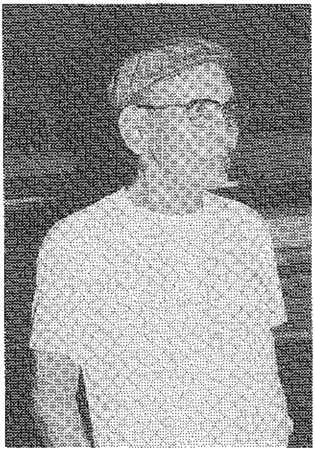


第７事代丸のものと伝えられるカツオ船の概要図（第五福竜丸平和協会蔵）

第七事代丸の船主寺本正市は和歌山県東牟婁郡太地町出身の漁業家で、昭和二十六年に事代漁業株式会社を創設し、神奈川県かつお・まぐろ漁業協同組合の理事長や三浦市議会議員を勤めた企業人である。

第七事代丸建造のいきさつについては「水爆実験との遭遇」（三一書房刊）が詳しく、要約すると次のようである。

終戦当時農林省水産局漁業漁船課長であった高木惇氏（東京大学名誉教授）は食料難の日本で漁船の必要性をＧ・Ｈ・Ｑ（連合軍総司令部）に訴え、ようやく昭和二十年末に漁船に限って三十三万トンが建造できるようになった。このうち鋼船はす



第７事代丸を建造した棟梁の南藤藤夫さん（平成６年８月撮影・第五福竜丸展示館蔵）

べてＧ・Ｈ・Ｑの許可が必要で、木造船は百トン未満に限って許可なしで建造できた。寺本氏は木造船建造の相談を高木氏にもちかけ、その許可を得た。その条件はＧ・Ｈ・Ｑの許可を必要としない百トン以下の木造船とすることであった。

昭和二十一年九月寺本氏は郷里の親戚を通じ、太地にほど近い古座の古座造船所に第七事代丸建造を発注した。船はかつお釣船とし、翌年春のかつお漁までの完成を希望した。船大工八人が建造にあたった。しかし終戦直後の厳しい物資統制令のため材料の入手に苦心し、戦時中に計画造船のために伐採された木と同郡紀宝町七里御浜の松が使用されたという。造船途中の昭和二十一年十二月二十一日には紀伊半島南方に発生したＭ八・一の大地震（南海地震）にあったりして、ようやく翌二十二年三月二十日の進水式を迎えている。

この船は進水時は九十九トンとされているが、実際は百四十トンに近い大きさであった。（中略）

以上のような時代背景と建造時のいきさつにより、第七事代丸は誕生に至った。

同じく「水爆実験との遭遇」によると第七事代丸の航海は順調で、当時のかつお漁の水揚げでは全国のトップを走っていたという。南はフィリッピン、台湾、沖縄から北はカムチャッカ半島に至るまでの広い範囲で操業し、乗組員は四十人～五十人であった。

このようにかつお漁船として好成績をあげた第七事代丸であったが、建造四年後の昭和二十六年に静岡県清水市の金指造船所でかつお釣船特有の長い舳先を切断し、まぐろ船に改造した。このへんの事情に関しては明確ではないが、この年は寺本氏が事代漁業株式会社を創立した時であり、また、終戦直後に設定された漁業区制限であるマッカーサー・ラインが撤廃され、再び遠洋漁業が可能となった年でもある。季節的なかつお漁よりも周年操業できて、缶詰や冷凍品で世界市場を対象にできるまぐろ漁の方が企業としては有利な経営が期待できる。昭和二十四年ごろから第一清勝丸をはじめ、百五十トン級のまぐろ延縄船が建造され、同二十六～二十七年には商業資本による本格的な船の建造が相次ぎ、事代漁業株式会社でも二十八年には四百トン級の第十事代丸が進水している。第七事代丸のまぐろ延縄漁船転換にはこうした漁業界の動きが関係していると思われる。

改造された第七事代丸はまもなく昭和二十八年に静岡県焼津市の西川角市氏に千二百万円で売却されてしまった。これはおそらく前述の第十事代丸の完成と関係するものであろう。

（中略）

西川氏は戦後富士水産会社の第二福竜丸の船長としてかつお漁に携わっていたが、マグロ専用船を持ちたいという意思を持っており、船員の中から希望者を第七事代丸に派遣して実習させた。そしてこの船を買取り「第五福竜丸」と改名して、西川氏は船主として本格的なまぐろ漁に乗出したのである。』

西川さんは第七事代丸を買い取るに当たって、幹部候補生の船員をこの船に派遣して実習させてい

さん、機関長となる山本忠司さんの三人である（三人とも第五福龍丸でビキニ事件に遭遇する）。

この三人のことについて「ひかりのばら」編集委員会が平成六年八月に発行した「ひかりのばらは・第五福竜丸ものがたり」の中で次のように記されている。

『富士水産の株主で第二福竜丸の船長の西川角市さんは、船主となりマグロ遠洋漁業を計画していました。そして、同船の乗り組み員である見崎吉男、後に機関長となる山本忠司、船長となる筒井久吉さんを、神奈川県三崎港のマグロ漁船第七事代丸にマグロ漁業見習いに送り出していました。』

三人とも第七事代丸には一般船員として乗り組み、ここで三崎漁法をみっちりと学んだ。見崎さんは乗船していた期間ははっきりと覚えていないというが、三人とも三航海を経験したという。第七事代丸は二十八年三月には西川さんに売却され、六月には第五福龍丸として第一回の航海に出ているので、三人が三崎にいた期間は二十七年の暮れから、二十八年の五月ごろまでと推測される。ちょうどこの期間、久保山さんも三崎にいたのだが、三人とも久保山さんを知らなかったという。三人とも福龍丸になってから初めて久保山さんと知り合った。

この四人のほかもう一人三崎で武者修業した船員がいる。甲板員の鈴木（のち吉岡）鎮三さん（当時二十七歳）で、鈴木さんは十七歳のときに三崎でマグロ漁船に乗った。太平洋戦争末期の昭和十九年のことで、すぐ船ごと軍に徴用されたという。鈴木さんに関してはさまざまなエピソードがあるがここでは省略する。

番号	船籍港	造船者	進水年月	原名
58537	和歌山縣東牟婁郡古座町	有限会社古座造船所	昭和弐拾弐年四月	第七事代丸

信号符字	JJAG				
種類	帆 船	船	汽 船	船	船
船名	第五福龍丸	はやぶさ丸			
船籍港	東京都				以下余白
船質	木				
帆船ノ帆装	二檣ケッチ				
上甲板ノ長サ	25 米 20	米	28 米 56	米	米
船体最広部ノ幅	5 米 70	米	5 米 91	米	米
深サ	2 米 95	米	3 米 00	米	米
総噸数	99 噸 09	噸	140 噸 86	噸	噸
総積量	280 立方米 712	立方米	398 立方米 045	立方米	立方米
上甲板下ノ積量	248 立方米 014	立方米	330 立方米 794	立方米	立方米
上甲板上蔽囲シタル場所ノ積量	32 立方米 698	立方米	68 立方米 251	立方米	立方米
船首楼ノ積量	立方米	立方米	24 立方米 205	立方米	立方米
船橋楼ノ積量	立方米	立方米	立方米	立方米	立方米
船尾楼ノ積量	立方米	立方米	立方米	立方米	立方米
甲板室ノ積量	30 立方米 154	立方米	44 立方米 046	立方米	立方米
艙口ノ超過積量	2 立方米 544	立方米	0 立方米	立方米	立方米
機関室ノ積量	立方米	立方米	立方米	立方米	立方米
其他ノ場所ノ積量	立方米	立方米	立方米	立方米	立方米
控除積量	158 立方米 187	立方米	186 立方米 522	立方米	立方米
船員常用室ノ積量	54 立方米 426	立方米	53 立方米 970	立方米	立方米
補助水艙ノ積量	立方米	立方米	立方米	立方米	立方米
機関室ノ積量	89 立方米 828	立方米	97 立方米 753	立方米	立方米
帆船ノ帆庫ノ積量	立方米	立方米	立方米	立方米	立方米
其他ノ場所ノ積量	13 立方米 933	立方米	34 立方米 799	立方米	立方米
純積量	122 立方米 525	立方米	212 立方米 523	立方米	立方米
純噸数	43 噸 25	噸	75 噸 02	噸	噸
機関ノ種類及数	発動機 1 箇	箇	箇	箇	箇
推進器ノ種類及数	螺旋推進器 1 箇	箇	箇	箇	箇
所有者	文部省				
登録年月日	昭和廿九年八月六日	昭和[illegible]年六月[illegible]日	昭和[illegible]年八月[illegible]日	昭和45年7月31日	年 月 日
記事	[illegible]ヨリ轉籍 旧船籍港 焼津市	船名変更	改造ニ因リ尺度及積量[illegible]変更	昭和45年7月1日[illegible]	

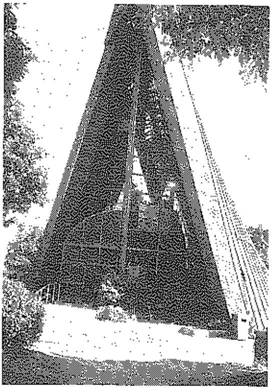
21.5.22 [illegible]

船舶原簿甲号用紙

第五福龍丸が第七事代丸であったことを示す船籍簿。その後の数奇な運命が記録されている。

第五福龍丸は四回航海をするが四回目の航海（五回目とする資料もある）で、ビキニ事件に遭遇するのである。

被災後の第五福龍丸は政府が買い上げ、東京水産大学練習船（はやぶさ丸と改名）となり、その後、廃船、東京夢の島廃船処理場に放置など数奇な運命をたどった。やがて保存運動の盛り上がるところとなり、紆余曲折を経て、夢の島に展示館が作られることになり、昭和五十一年六月十日、東京都江東区夢の島の現在地に展示館が完成した。被爆以来二十二年目のことである。展示館には今なお毎日多数の人たちが見学に訪れている。



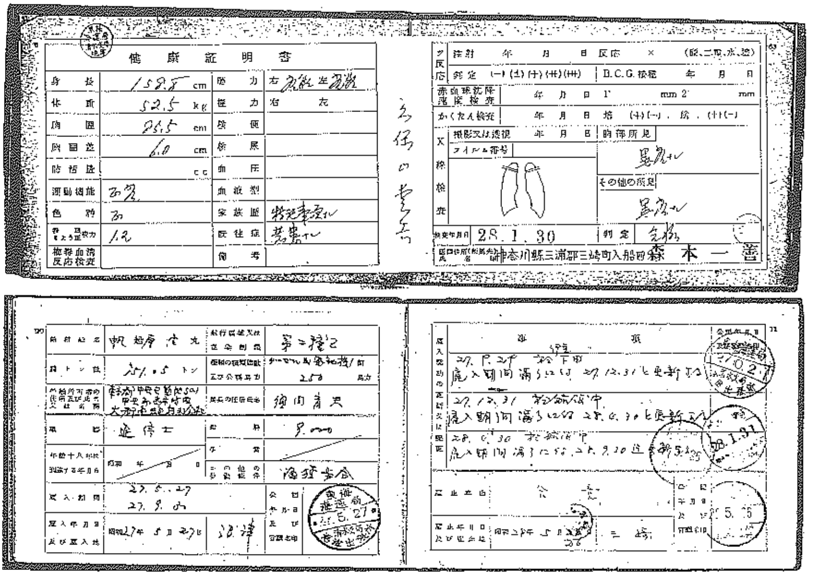
第五福竜丸展示館全景

余談だが、現在事代漁業で活躍中の第七事代丸（三七九トン）は、平成五年に建造された新造船である。

久保山さんは三崎にいた

久保山さんは第五福龍丸に乗る直前まで三崎にいた。これを証明する直接の資料は第五福竜丸展示館に保存されている久保山さんの船員手帳である。

昭和二十六年十月十九日に再交付された船員手帳（焼津市役所発行）の十ページを見ると船種船名の欄に「帆船厚生丸」、職務の欄に「通信士」、雇入期間の欄に「27・5・27　27・9・30」、雇入地「沼津」と記入されている。その後雇入れ期間は三回延長され、昭和二十八年五月二十六日に雇止め



久保山さんの船員手帳　（上）森本一善さんが書いた健康証明書　（下）厚生丸の乗船記録。関東海運局三崎出張所の印が押してある。（第五福竜丸平和協会蔵）

となり、雇止め地の欄に「三崎」と記入されている。久保山さんが三崎と関わったのは丁度一年間である。

厚生丸は東京大都魚類株式会社所有の一五一・〇五トンのマグロ船で、大洋漁業株式会社に所属、大洋漁業の船団の傘下に入っていた。久保山さんが契約した地が沼津になっているのは、昭和二十七年五月二十七日には同船が沼津市の江ノ浦で、ドックに入っていたためである。船長は須田育夫さんである。

厚生丸は、大洋漁業の天洋丸船団に所属し、昭和二十七年六月十一日三崎港を出港した。久保山さんはこの日、早速三崎漁業無線局に『十時三崎発一路南下中』と連絡してきた。三崎での久保山さんの初仕事である。

昭和二十八年五月十八日、久保山さんは厚生丸で三回目の航海を終えて三崎港に戻ってきた。このあと厚生丸を降り、焼津に帰って第五福龍丸に

乗り組むことになる。
久保山さんは、三航海目の出港に当たって、二十八年一月三十日に三崎の森本医院で健康診断を受けている。これは船舶職員法により義務付けられているもので、指定医の健康証明書がなければ乗船できない。この証明書は船員手帳の最後のページに添付されている。この証明書には「神奈川県三浦郡三崎町入船四　森本一善」という印が鮮明に押されている。翌三十一日に三回目の契約を結ぶが、公認年月日の欄には、関東海運局三崎出張所の印が押されている。
このことから、久保山さんが三崎にいたことは、はっきりとわかるのだが、三崎のどこに下宿をしていたのか、あるいはどこの旅館を定宿としていたのかはわからない。当時、船員や、その家族が良く利用していた辰己家旅館などには、その当時の宿帳は保管されていないので調べようがない。焼津市役所にある戸籍簿には、久保山さんが三崎に移ったということを示す痕跡はないという。久保山さんは、三崎港での滞在が短いときは船や旅館を利用し、長いときは自宅に帰るという生活をしていたのではないだろうか。第七事代丸に乗り込んだ見崎さんらも、入港するたびに焼津に戻ったといっている。
昭和二十七、八年ごろ久保山さん宅で下宿をしていた久保山さんの妻すずさんの実弟の椿原源蔵さんは、「義兄は三崎に船が入ると焼津に戻って来た。当時は（自分が）まだ若く義兄と話をするということもなかったので、三崎のことは記憶に無い。義兄は酒は強い方だった」といっている。このことから、久保山さんは、三崎では下宿をせず、滞在するときは旅館か船を利用していたと思われる。

県漁業無線局が昭和五十五年十月に発行した「漁業無線局50年のあゆみ」の巻末に収録されている諸先輩の語る「漁業無線局の今昔」という座談会（出席者は九人）の中で、話題がビキニ事件に及んだとき、次のような会話が記録されている。

『**高岡**　私は三崎にきて三十年で去るわけですが、在職中の二度に亘る移転等も思い出ですが、そのことよりも「原爆マグロ問題」が、強く印象に残っています。金沢さんのところも被害を受けたんですね。

金沢　もろに受けましたよ。

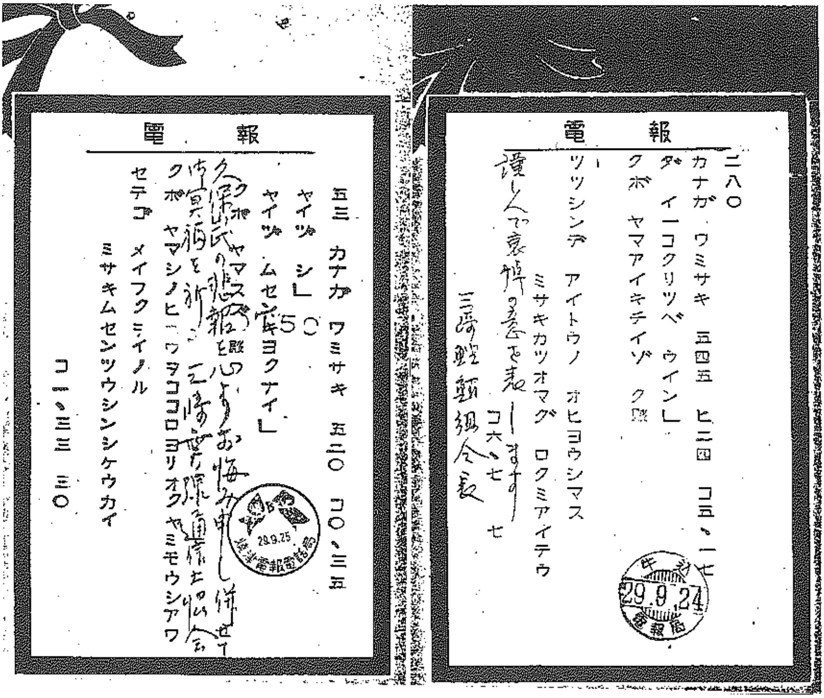
高岡　折角苦労してとってきたマグロを、全部棄てるなんて、福竜丸事件がキッカケですね。

梅津　丁度福竜丸の久保山局長が、出漁前私のところに挨拶にきたんです。』

（※　高岡重治（元漁業無線局長）、金沢徳尾（第十三光栄丸船主・故人）、梅津雄治郎（元漁業無線局長・故人）

発言としてはこれだけなので、詳しいことはわからないが、出漁に当たって世話になる無線局に挨拶にきたという久保山さんの律義な一面が伺える。梅津さんはこのときの局長である。梅津さんは久保山さんがきた時期を「出漁前」といっているが、何回目の出漁のときなのか、梅津さんがなぜ久保山さんを記憶していたのか、どういう付き合いだったのかなど詳しいことはわからない。三崎にある文献で、久保山さんが三崎にいたことを伺わせる文献はこれだけである。

久保山さんの乗った厚生丸は大洋漁業の船団に所属し三崎を基地としていた。このため、当時大洋



久保山さんの死に際し三崎から届けられた弔電（焼津市歴史民族史料館蔵）

漁業三崎営業所に勤務していた人たちの中で、久保山さんを記憶している人が何人かいる。

大洋漁業三崎営業所で無線機のバッテリーを扱う仕事をしていた林正男さん（千葉県木更津市在住）は、この仕事を通じて何回も久保山さんと会っていたこと、久保山さんが乗っていた船が厚生丸だったことを記憶している。仕事上の付き合いだけだったので、詳しいことはわからないが、まじめで気さくな人だったという。

久保山さんは、三崎に入港の都度、林さんのもとを訪れ、バッテリーのことでいろいろ打ち合わせをしたという。

大洋漁業三崎営業所で総務関係の仕事をしていた栗田辰次さん（横須

賀市林在住）は、久保山さんと一度だけ、会社の倉庫の前で会っている。栗田さんは総務関係の仕事をする以前は大洋漁業所属マグロ船の通信士をしていた。大洋漁業所属の通信士仲間で「緑線会」という親睦会を作っており、栗田さんも久保山さんもその会員だった。久保山さんの葬儀のとき「同じ仲間だったのだから、大洋の通信士を代表して弔文を送るように」と先輩の松尾さんからいわれ、緑線会の名で弔文を速達で送ったことを記憶している。弔文がどんな内容だったかは記憶にないという（この弔文は保存されていない）。葬儀には「大洋漁業」の名で花輪も贈られている。

大洋漁業以外では、三崎電機株式会社が関わっていた。

三崎電機でマグロ漁船の無線機の修理などを担当していた川崎貞之さんは、久保山さんの依頼で厚生丸が入港すると船に行き無線機の修理点検をした。何度か会話も交わしたが、主に仕事の話だったという。おとなしく円満な人で、自分一人ではしゃぐようなことはなかったという。酒の付き合いはなかったが、よく呑みにいっていたらしいという。

同じ三崎電機にいた池田勇さんも、久保山さんに頼まれて無線機のモーターの点検を担当したことがあり、久保山さんと会話を交わしたことを記憶している。おとなしい、いい人だったという印象を語っている。

船員組合執行委員長の浅井繁春さんは、通信士協会の事務所に出入りしていた久保山さんを記憶している。だから久保山さんが亡くなったときは「身近な人が犠牲になったような怒りを感じた」といっている。

久保山さんの健康診断をした森本一善さんは、関東海運局の指定医として、当時毎日のように大勢

の船員の健康診断をしていたので「久保山さんの記憶は全く無い」という。

森本さんは平成五年三月十二日に行われた「核兵器廃絶、3・1ビキニ被災三浦国際シンポジュウム」開催の呼びかけ人の一人となっている。全く偶然のこととは思えないものを感じさせる。

焼津市在住で、第五福竜丸平和協会評議員の飯塚利弘さんは自著「死の灰を越えて―久保山すずさんの道」の中で次のように書いている。

『…それから神奈川県の三浦三崎港からマグロ漁船が船団を組んで遠洋漁業に出かけることを聞き、参加を申し出た愛吉は無線長として南太平洋へ出漁した。

一九五三年（昭和二十八年）六月五日、愛吉は焼津の西川角市船主が購入したばかりの第五福竜丸に無線長として乗ることを決め契約を結んだ』

三崎での雇い止めが昭和二十八年五月二十六日だから、久保山さんは厚生丸を降りるとすぐに郷里に戻り、第五福龍丸と契約したことになる。久保山さんは第五福龍丸の初航海から四航海連続で乗船しているが、四航海目で運命のビキニ事件に遭遇したのである。

著者の飯塚さんは、「この当時、焼津の船員は、三崎で修行して地元の船に乗るという傾向があった。久保山さんもその例にならったものと思う。ビキニ事件以前の久保山さんについての資料は、ほとんど散逸してしまっているので、これ以上のことはわからない」といっている。

久保山さんは、昭和二十九年九月二十三日、放射能症のため、国立東京第一病院で死亡、十月九日に焼津市で漁民葬が行われたが、亡くなった直後と、漁民葬の際、三崎から弔電が送られた。

焼津市歴史民族史料館に保存されている久保山さんへの弔電の中に、三崎から送られたものが四通保管されている。

九月二十四日付けでミサキカツオマグロクミアイテウ（丸生組合長＝寺本正市さん、第五福龍丸の前身・第七事代丸の船主である）、ダイ三フクコウマル（第三復興丸・大洋漁業所属船）

九月二十五日付けでミサキムセンツウシンシケウカイ（三崎無線通信士協会）

十月九日付け（漁民葬）でミサキエンガン（三崎沿岸漁業協同組合連合会）からのものである。

三崎でのビキニ事件を語る上で、第七事代丸と久保山さんは、欠かすことのできない重要な裏面史である。

久保山さんの前にビキニ犠牲者がいた？

久保山さんはビキニ水爆実験の犠牲者第一号とされているが、実はその前にビキニ水爆実験の影響を受け、原爆症と見られる症状で死亡しているマグロ漁船員がおり、しかもその船員の葬儀が三崎で行われていた。

昭和二十九年五月二十一日、三崎の最福寺で東貿易株式会社所属マグロ漁船第七清寿丸乗組員吉岡洋さん（一九歳）の社葬が執り行なわれた。吉岡さんは操業中急病となり、パラオの病院で死亡したのだ。葬儀を知らせる広告が、五月十九日の三崎港報に出ている。

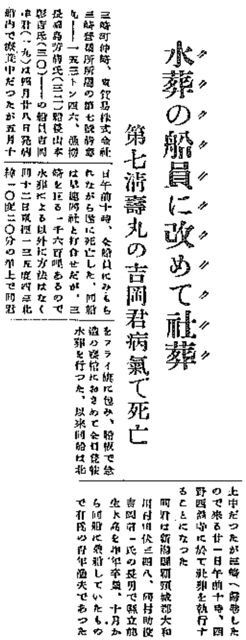
吉岡さんは新潟県の出身で三崎の出身ではないが、死因がビキニ水爆実験の影響による可能性があ

り、しかも第五福龍丸の久保山さんが亡くなるより四か月以上も前の死亡となると無関心ではいられない。

第七清寿丸は二十九年四月初め、三崎港を出港した。漁場はビキニの遥か東の東経一四〇〜一五〇度、北緯一〇度付近を予定していたが、機関長が急病になり、インドネシア領に緊急入域したこともあって予定を変更、バンダ海で操業した。ビキニからは四〇〇〇キロ以上も離れているところだ。

吉岡さんの体調がおかしくなったのは四月二十八日ごろだ。食事がノドを通らず、四十度以上の高熱を出して苦しみ出した。病状が日ごとに悪化してくるので、このままでは危険と判断した船長は操業を切り上げ、パラオ諸島に緊急入港して病院に入れた。五月八日だった。吉岡さんは二日後の五月十日に病院で死亡した。

第七清寿丸はそのまま帰途につき、吉岡さんの遺体は途中で水葬に付された。第七清寿丸は五月十九日三崎港に入港した。同じ日に入港した第八順光丸から多量の放射能が検出されて、三崎港では大騒ぎになった。その点、第七清寿丸は船からも、魚からも、船員からも放射能は検出されなかった。



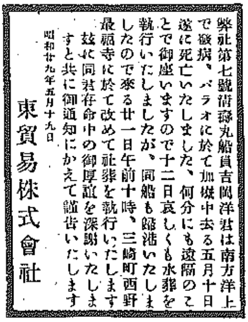
水葬の船員に改めて社葬

第七清壽丸の吉岡君病氣で死亡

三崎町仲崎、東貿易株式会社三崎営業所所属の第七號清壽丸—一五三トン四六、漁撈長福島労作氏(三二)船長山本彪吉氏(三〇)——の船員吉岡準君(一九)は四月廿八日発病船内で療養中だつたが五月十日午前十時、全船員にみもられながら遂に死亡した、同船は早速同社と打合せたが、三崎を距る一千六百哩あるので水葬による以外に方法はなく同十二日東経一三五度四三北緯一〇度二〇分の洋上で同君をフライ旗に包み、船板で急造の寝棺におさめて全員[illegible]水葬を行つた、以来同船は北上中だつたが三崎へ帰港したので来る廿一日午前十時、西野西福寺に於て社葬を執行することになつた

同君は新潟県頸城郡大和川村田伏三四八、同村助役吉岡有一氏の長男で県立能生水産を本年卒業、十月から同船に乗組していたもので有望の青年漁夫であつた

吉岡さんの葬儀を報じる
三崎港報の記事



弊社第七號清壽丸船員吉岡洋君は南方洋上で發病、パラオに於て加療中去る五月十日遂に死亡いたしました、何分にも遠隔のことで御座いますので十二日哀しくも水葬を執行いたしましたが、同船も歸港いたしましたので來る廿一日午前十時、三崎町西野最福寺に於て改めて社葬を執行いたします

茲に同君存命中の御厚誼を深謝いたしますと共に御通知にかえて謹告いたします

昭和廿九年五月十九日

東貿易株式會社

三崎港報に掲載された吉岡さんの社葬の広告

世間の関心は第八順光丸に集まっていた。だからこの時点では、吉岡さんの死因が放射能と関係があるのではないかと考える人はだれもいなかった。

蒼No.5には、パラオの病院側の話として次のような談話が紹介されている。

『原因とか病名はわからないが、何かの原因で免疫機能が急激に低下したので、菌に対する抵抗力が失われ、菌が脊髄を通って脳にまで達した』

この談話からすると単なる食中毒や、風邪といったものでないことは確かだった。では「免疫機能が急激に低下する」とはどういうことなのか。

吉岡さんは大変元気な青年で体力も旺盛だったという。他の船員が病気になっても、彼が病気になることは考えられないというくらい元気な青年だった。それが急死するからにはよほどの原因がなければならない。

第七清寿丸の操業位置からは、ビキニの水爆実験の影響を想像することは出来なかったが、七月四日に帰ってきたビキニ調査船俊鶻丸の調査結果では、第七清寿丸が当初操業を予定した海域は放射能でかなり汚染されていることがわかった。第七清寿丸は操業こそしなかったがこの地帯を通過している。バンダ海は全く影響ない。

これだけを見ると吉岡さんと放射能との因果関係は薄いが、吉岡さんは、汚れた体を洗ったり、自分自身を引き締めるために、海水を頭からかぶるのが好きだった。当初の操業予定の海域でもしきり

に海水を浴びていたという。ほかの船員はあまりやっていない。放射能に汚染された海水から放射能が吉岡さんの体内に入り込んだことは十分に考えられる。

この前の航海はビキニの東側で操業している。この海域はかなり汚染されている海域で、ここでも吉岡さんはしきりに水浴びをしていたという。

水浴びをしただけで放射能症になるか、という疑問があるが、市立病院の五十嵐捷介院長は「水を浴びたとき放射能を含んだ物質が鼻や口から体内に取り込まれることは十分に考えられる。また毛髪などに蓄積された物質が、なにかの拍子に体内に入ることも考えられる。体内に取り込まれた場合は、白血球の持つ免疫機能にダメージを与え、白血球の急激な減少という現象が起きることは十分に考えられる。吉岡さんの場合、どのくらい白血球が減少したのかわからないので、吉岡さんの死が放射能に関係あるとも、関係ないとも断定は出来ない」といっている。ただ、病気の症状はその可能性があることを十分に示唆している。もし、原爆症であったとすれば、吉岡さんはビキニ事件の犠牲者の第一号ということになる。

三崎保健所坂野所長の苦悩

三崎でのビキニ事件がスタートすると同時に、現場の責任者として否応なしにマスコミ、漁業者、一般市民の矢面に立たされたのが三崎保健所の坂野薫所長である。

新聞記者の取材攻勢、漁業者への対応、市民への対応などその場で、自分自身の判断でものをいわなければならない立場に立たされた。

取材合戦の中で新聞記者はピリピリしている。ガイガー計数管のほんの僅かな反応にも、記者たちは過剰反応した。業者はあまり騒いで欲しくないと思っている。市民は不安で詳しい情報を知りたいと思っている。三者三様の思いが坂野さんのもとに集中したのだ。夜になっても自宅の電話は鳴り続けた。坂野さんの神経もピリピリしていた。

書く側の新聞記者はもとより、書かれる側の漁業関係者からの電話も多かった。検査に対する抗議やらお願いやらが中心で、怒気を含んだものも多かったという。坂野さんは図らずも三崎の漁業者の多くを敵に回すことになった。当時の三崎はマグロ黄金時代で、マグロに関係している人たちの勢いは強かった。その人たちを相手に一人で対応するのだから、その勇気は大変なものだったろう。電話はすべて坂野さんが受けたが、電話の主に対する坂野さんの怒りも相当なものだったと家人は証言している。

「だれが何といおうと危険なものは食わせるわけにはいかない」というのが坂野さんの主張だった。この主張を最後まで押し通した。坂野さんは純粋に科学者の立場に立って、ビキニ事件に対処したのである。坂野さんのこの強い姿勢がなければ、当時の現場はかなり混乱したものとなっていたろう。保健所を退職してから坂野さんは家人に対して「保健所生活の中でクビを覚悟で取り組んだ仕事が三つある。ビキニ事件はその一つだった」と述懐したという。

業界のマスコミ対策

第五福龍丸事件が新聞で報道されてから魚価が急激な値下がりをしたため、船主、魚商団体はマス

コミでの報道に神経を使った。マスコミの姿勢は消費者保護である。僅かなガイガーカウンターの反応にも過剰反応する。漁業関係者が、まずマスコミの過剰反応の沈静化対策を考えたことは十分考えられる。そのことを伺わせる記録が幾つかある。

三月十八日の三崎港報は『全土に伝えられた「原爆まぐろ云々」を爆砕して三崎まぐろの販売線の急速な正常化をはかることにした。よって委員会は直ちにこの運動方法立案するわけだが、NHKをはじめ東京各紙本社を訪問して厳正、然も発表通り絶対にだいい丈夫という実情を説明して誤り伝えられた問題の解決を図るようだ』

続いて三月二十日の三崎港報は『遠洋漁業者を中心として関係方面へ〃三崎のまぐろは絶対大丈夫〃と申入れ、誤り伝えられた世評の一掃にど力していたが、東京各紙をはじめNHKもようやく了承されたので…(以下略)』と報じている。

三月十八日に日鰹連の中に設置された「太平洋漁業対策本部」には、四つの部会が設けられたが、この中に科学部会があり、マスコミ対策を担当した。同会の「日鰹連史Ⅰ」の原爆被災事件の発生の項に、次のような記述がある。

『しかし各報道機関は、共通して原水爆の禁止を論調として、原水爆の危険を強く国民に伝えようと取材した結果、〃まぐろは危険〃との観念を消費者に与え、前述のとおり、魚類取引は休業の状態におちいった。そこで消費者の過度の不安恐怖心の一掃がさし迫った問題であり、対策本部はまずこの面の解決に最大の努力を傾注した。』

対策三崎本部の動きとしては、次のように記されている。

『水揚停止処分を受けた第一三光栄丸の対策としては三月二十七日以来連日協議を重ね、当局に対し正確な検査と正式の指令を要望すると共に厚生省、水産庁、県庁と連絡しつつ配置完了までの一切の対策を樹てる一方、報道関係には慎重な取扱いを要望した。』

かつおトまぐろNo.42に次のような記事が載っている。

『三月十六日以後、各新聞、ラヂオはけたたましく原爆被災事件を報じ俄然〃まぐろは危険〃の観念を消費者に与え魚類取引は休業の事態に至った。

消費者の過度の不安、恐怖心の一掃が差迫った問題であり、対策本部は先ず以てこの面の解決に最大の努力を傾注した。以下は各機関に対する宣伝対策の概要である。

〔新聞〕

事件が一部日刊紙に報道されるや漁場、対策等について日刊各紙の問合せは引きも切らず、本会ではこれに対し声明書を農政記者クラブで発表、翌日一部日刊紙は本会声明として全文を掲載した。

（中略）

二十六日には横山本部長は評論家中島賢蔵、河盛好蔵及びNHK論説委員の各氏と面談、漁業の実情を述べ、過度の不安感を大衆に与えないよう要請した。』

こうした働きかけとともに、実際にマグロが安全であることを自分たち自身で確かめてもらおうと、新聞社内にマグロを持ち込んでのマグロ試食会も開かれた。四月二十七日の三崎港報に次のような記事が出ている。

『まぐろ対策本部では依然として、低調を続けている魚価の打開策として、さき頃から消費者不安

をいっそうするため各方面でまぐろの試食会を開催、放射能権威者による物体とまぐろの放射能について解りやすい説明を願い非常に成功したので、明二十八日東京各新聞社を訪問、まぐろを試食してもらうことにした。明日は組合代表が、各社を訪問の予定で結果が期待される。』

こうした働きかけをする一方で、対策本部では連日、ラジオ東京、文化放送を積極的に使って宣伝放送を試みている。

まさにマスコミは、漁業者にとって双刃の剣だったのである。

あなたにも放射能がある

マグロに対する消費者の不信感をぬぐうために、生産者はあの手、この手のPR作戦を繰り広げたが、その中に「あなたにも放射能がある」という逆説めいたパンフレットがある。三月二十二日の三崎港報にその内容が紹介されている。

『おどろいてはいけません
あなたの身体にも　毎日食べるお米にも
(毎分) 二〇 (カウントパーミニッツ) から　一〇〇 (同) の放射能があります
温泉にも放射能があるから喜ばれているのです
こんな簡単なことを知らないで　日本中がお魚におびえている
新聞が毎日書いている漁船や　まぐろ放射能は驚くに及びません
こわいのは放射能より、無知ではないでしょうか

さあ！安心して毎日まぐろで栄養を取って下さい』

丸魚の二十周年記念誌「沿革」には『人体にもともと微量の放射能があることを述べた「あなたにも放射能がある」と題するパンフレットを配布して逆を衝いたりもした。』と記されている。

このパンフレットを制作したのは水産経済新聞社だと三崎港報は書いているが、どんな資料を使って制作したかについては触れていない。

ガイガー計数管購入、すぐ故障

放射能に汚染されたマグロの検査に威力を発揮したのがガイガーカウンターだが、ビキニ事件が発生するまで、この機械のことはほとんどの人が知らなかった。もちろんどこにでもあるというものではない。三崎でこの機械を持っているところはどこもなかった。そこで、三崎町では急遽この機械を購入したが、すぐに故障してしまったという。このことについて、三月二十九日の朝日新聞に次のような記事が出ている。

『三崎町では一台十八万円のガイガー・カウンター二台を科研から買入れた。「厚生省がもってきた小型のは不正確で当てにならぬというので、思い切って買いましたが…経費はどうひねり出したらよいか」と心配している。しかし科研で普通一カ月の試験期間をおくのを、急ぐからとたった一日の試験で運んだので一台は早くも不調で、二十八日の検査には使用できなくなってしまった。』　二十八日の検査とは第十三光栄丸の検査のことである。

放射能は洗剤で消えた

放射能が洗剤で消えた…この信じられないような事実が第十三光栄丸で実証された。

第五福龍丸の事件が表面化してから、出漁中のマグロ漁船は、船主から「船体をよく水で洗うように」という指示を受けた。多くの漁船は、帰港中はもちろんのこと、入港直前、城ヶ島沖でさらに綿密な水洗いをしてから入港した。この中で威力を発揮したのが液体洗剤だった。

第十三光栄丸では、三〇〇〇カウントの放射能が検出された船体を高級アルコール洗剤（モノゲンなど）、石油系合成洗剤（ニューレックスなど）で洗ったところ放射能が消えてしまった。もちろん科学的な根拠があってやったことでもなく、厚生省の指示があったわけでもない。窮余の一策としてやった結果なのである。こうした液体の洗剤が放射能に有効などということは、当時知られていなかった。これにはメーカー側もおどろいたらしく『三崎で実験した結果は当社としては一大ニュースだが、放射能に直接効くとは考えられずまた研究もしていない』というメーカーの話が、二十九年五月一日の水産経済新聞に紹介されている。

当時、多くのマグロ船が洗剤や石鹸を使って船体の水洗いをしているが、効果のあった船もあればなかった船もある。どういう種類のものを使ったのかわからないので、ここでは比較できないが、このことが科学者の立場から公表されていたら、放射能に対する一般の不安や恐れももっと変わったものになっていたのではないだろうか。

水産試験場の対応

ビキニマグロ事件では三崎保健所の活躍が目立ち、当時の新聞紙上でも、三崎保健所、厚生省の名が度々紹介されたが、地味ながら水産試験場の働きも見逃すことはできない。

三崎水産試験場では、三崎での動きが始まった三月十七日から動き出した。当時マグロ資源の調査を担当していた中込淳さんは、場長の永井三夫さんから、危険区域に指定されている海域での漁獲量の調査を命じられた。この海域での漁獲量が、三崎港に水揚げされる全体量の何%に当たるかを割り出し、予想される補償問題の参考資料にしようという準備だった。しかし弾き出された量はほんの僅かだったところから、この数字は公表されることなくそのままお蔵入りになってしまったという。

また、水産庁からの指示で、ビキニ環礁付近で、操業または警戒海域を通過した漁船の詳細調査をしたが、三月二十二日、その結果を公表した。その内容が二十三日の神奈川新聞に出ている。

『警戒海域の操業船は一隻もなく、ビキニから四五〇マイルの海上を通過した漁船は三隻でこの漁船はいずれも三崎に入港して放射能検査は異常ないので、こんごの三崎マグロは絶対食べて心配ないことが保証された。』

こうした資料調査のほか、現場にも日参した。小金井正一さんは毎日魚市場に通いガイガーカウンターでの測定をしたし、野村俊造さんは、魚体の測定、漁獲量と漁場の記録などを丹念にとった。場長の永井さんも魚市場に日参し、自らガイガーカウンターで測定していたという。（当時水産試験場にはガイガーカウンターがなかったので、現場で借りたらしい）

三崎漁業無線局では、県の依頼を受けて三月十七日に危険海域付近に出漁中のマグロ漁船に対して、

海水を持ち帰るようにと連絡をしたが、三月二十五日夜、その第一号船として宮城県の第一福吉丸がサイダービン一本分の海水を持って三崎港に帰ってきたと、三月二十七日の読売新聞は報じている。その後、どの程度の海水が届けられたのか、海水の調査結果はどうだったのかについては不明である。

神奈川丸（県立三崎水産高校練習船）の対応

昭和二十九年二月に県立三崎水産高校の実習船・神奈川丸（九一トン）が完成、同船は三月八日、実習生十一人を乗せて三崎港を出港、初航海に出た。初代船長は石橋正さん（のち校長となる）である。神奈川丸は大洋漁業の第三天洋丸船団に参加して、インド洋のベンガル湾で操業することになっていた。出港したときは、すでにビキニでの第一回の実験が行われ、第五福龍丸は死の灰を浴びていたのだが、焼津に帰港する以前のことなので、事件はまだ公になっていない。

余談だが、三崎港を出港した神奈川丸は、沖縄付近に発生した低気圧を避けて、十一日朝高知港に入港、思いがけない「高知の休日」を楽しんだという。十二日朝、高知を出発した。

石橋さんはインド洋に向かう途中でビキニ事件を知った。ビキニとインド洋では正反対の方角である。全く影響はないと思いつつも大事な生徒を預かっている立場から神経を使った。まず、生徒にスコールを浴びてはいけないと禁じた。次に船に飛び込んでくる飛魚を捕まえて食べてはいけないと禁じた。飛魚は海の表面を泳いでいるので、海水が汚染されたとしたら飛魚が一番危険だからだ。

ビキニ事件の情報は刻々と無線で伝えられた。「日本の人たちは皆坊主になっている」といったものすごい情報もあった。だれが流したデマかわからないが、そのときは本気にしたという。

南支那海では食用にカツオを釣ったが、ここには、反赤道流が流れ込んでいるので慎重を期したという。神奈川丸は六月一日、無事三崎に帰ってきた。

実際にはインド洋とて安全ではなかった。五月二十三日に三崎に入港した第十一信宝丸はインド洋で操業していたのだが、サメから放射能が検出された。また、五月二十六日にも同じくインド洋で操業していた第八住吉丸のマグロからも放射能が検出されたのである。

神奈川丸は六月から八月にかけてマリアナ海域へ、八月二十八日から十一月十七日にかけては大洋漁業の第九次天洋丸船団に参加、ソロモン海域へでかけた。

ソロモン海域への航海では、ガイガーカウンターを積み込んだ。これが、マグロ船が、自前でガイガーカウンターを積み込むきっかけとなった。このときは釣り上げた魚を一尾ずつ計った。カツオから一三〇カウントの放射能を検出した以外は廃棄した魚はなかったという。ガイガーカウンターは途中で故障してしまったため、期待した成果は得られなかったが、計測は石橋さんが担当した。ソロモンにいったときは、生徒たちは三崎魚市場での検査の状況などを見ていたし、インド洋とは状況が違うので、かなり怖がっていたという。

放射能測定器具の常備船増える

練習船神奈川丸が、放射能測定器（ガイガーカウンター）を積み込み、沖でマグロの計測をしたことがきっかけとなって、他県の練習船や調査船でも、測定器を積み込むようになった。さらには民間船も積み込むようになった。このことについて十二月十日の三崎港報に、次のような記事が出ている。

『三崎町遠洋漁業者は、はるばる南海の果てまで出漁して、命がけで取ってきたマグロを放射能が検出されたからと放棄処分されてはかなわんと、最近は放射能測定器具を沖合に携行し、漁獲したその場で放射能の有無を検知、高カウントのものは直ちに放棄して来るマグロ船がふえてきた。

特に房総丸、岩手丸、福島丸、神奈川丸など、試験場、水産学校関係の調査実習船はほとんど手提型、ピストル型のサーベメーターを搭載しており、地洋丸、第二播州丸などの一般会社船十数隻も、小型メーターで成績を上げてきている。』

また、十月十六日の神奈川新聞は次のように報じている。

『(前略) すでに黒潮にのって日本近海にまで原爆汚染魚が泳いでいる実証から一部船主間には船員の恐怖を守るため、漁船用放射能測定器（完全防水）＝七万五千円＝を携帯させることになり、焼津二十船、三崎十船が試験的に同器を積み込んで出漁した。』

この記事では、具体的な船名が記載されていないので、何丸が持っていったのかは不明だが、三崎港所属船の間で、放射能測定器を積み込む船が出始めていたのは事実のようである。

俊鶻丸（五八八トン）は農林省水産講習所の練習船である。俊鶻丸は、水産庁が企画したビキニ海域の水爆実験の実態調査をするための調査船として、五月十五日、科学者、報道関係者、それに乗組員ら合わせて七十二人を乗せて東京港を出港した。

これだけでは三崎とは直接の関係はないが、複雑に絡み合う横糸をたぐっていくと、三崎の名前が見え隠れする。俊鶻丸はビキニ事件を語る上で、三崎にとって欠かすことのできない重要なつながりを持っている船なのである。

まず、大きなポイントになるのは、漁労担当乗組員として乗り組んだ五人の漁夫のうち、四人までが三崎に関係があること、調査団長をつとめた南海区水産研究所の矢部博さんは、県水産試験場とも交流があり、調査終了後、水産試験場で講演をしていること、調査をするに当たって編成された顧問団の一人に、当時東大教授で後に油壺マリンパークの初代館長となる末広恭雄さんが名を連ねていること、などである。調査結果が三崎の漁業関係者に役立てられたことはいうまでもない。

三崎に関係した漁夫は次の四人である。

加治木虎男さん（二七歳）仲崎（鹿児島県出身）
吉田　政夫さん（二二歳）入舟
木村　計介さん（三六歳）宮城
山崎政治郎さん（二二歳）白石

俊鶻丸が漁労担当としての乗組員を募集したとき、これに応じたのだ。そのとき四人ともたまたま三崎にいたことは確かなのだが、三崎の住人だったという確証はない。

年配の木村さんを除いて三人は二十代の青年である。俊鶻丸はビキニ海域で、六月二日から二十四日までにわたり、二十三回の延縄操業をしている。操業に当たっては五人の漁夫が主役だった。

俊鶻丸は七月四日、東京竹芝桟橋に帰ってきた。俊鶻丸の調査結果については趣旨が違うのでここでは省略するが、当初、日本の科学者やアメリカの科学者が予想していたよりビキニ海域の汚染はひどいものだった。ビキニ海域で釣り上げたカツオからは四万カウントもの放射能が検出されたという。竹芝桟橋に着いたときは全員が元気だった。ところが十日後、異変が起きた。漁夫として乗り組んだ加治木さんが原爆症と思える症状を起こして七月十四日に東京国立第一病院（現在は国際医療センター）に入院したのである。

七月十四日の日本経済新聞に次のような記事が出ている。

『ビキニ海域の調査からさる四日帰港した俊鶻丸に雇員として乗船していた神奈川県三浦郡三崎町仲崎船員寮内漁夫加治木虎男君（二六）は、下船したのち全身がひどくだるく、そのうえ食欲がまったくなったので、一度横須賀の医師の診断を受けたところ、下船時平常だった白血球（六〇〇〇―八〇〇〇）が、三二〇〇に激減していたと十三日正午水産庁海洋第二課子安事務官に相談してきた。驚いた同事務官はただちに俊鶻丸調査団医師溝田成氏に連絡、午後一時新宿区若松町の国立第一病院で同医師の診断を受けた結果、白血球が五五〇〇で正常の範囲外に減っており、加治木君の訴える症状などから放射線の影響によるものではないかと見られている。』

同じ七月十四日の毎日新聞は次のように書いている。

『ビキニ水域の水爆被害調査船俊鶻丸に乗組んだ漁夫加治木さんと木村計介さんは帰国後けん怠感を訴えていたが十三日上京、国立第一病院で同船乗組みの溝田医師の診断を受けた。その結果、加治木さんは白血球が五五〇〇（常人は七〇〇〇―八〇〇〇）になっており、木村さんも若干減っていたので、しばらく療養をつづけることになった。

溝田医師談　二人とも白血球は減っているが、ビキニ調査の際受けた放射能の影響によるものかどうかはわからない。』

神奈川丸・石橋正船長、俊鶻丸乗組員を叱る

俊鶻丸に乗り組んだ科学者、報道陣による俊鶻丸の居住性、食生活の評価は決して高くなかった。七月四日に帰国した一行は、船内生活の不便さ、食事のお粗末さを話しこれが新聞で報道された。これを読んだ三崎水産高校の練習船神奈川丸の石橋正船長は怒った。「乗組員たちは、俊鶻丸を豪華客船と間違えているのではないか、マグロ船員はもっと酷い環境の中で操業するのだ」と石橋さんはいう。石橋さんは治まらない胸の内を原稿に書いて、毎日新聞社に投稿した。この原稿が七月八日の毎日新聞に掲載された。

『俊鶻丸と耐乏生活

◇俊鶻丸の乗組員諸兄ごくろうさま。かつて練習学生として、また航海士として乗ったことがある私は、うすよごれた船の写真を見て心からそういわずにはいられなかった。ところが調査団の座談会

の記事で船内の生活の苦しさを「想像に絶す」といっているのを読んで驚いた。
◇それなら俊鶻丸の何分の一かの本船での百日を越えるインド洋航海は一体どんなことになるのか。冷房のある部屋は我々からみれば天国。シャワー、ふろ、食事に対する不満は笑止千万。長期航海では耐乏生活は当然。調査団員のみなさまの御苦労には頭を下げるが俊鶻丸とウィルソン号と混同しないでいただきたい。』

NHKで現地の声録音

NHKが五月二十四日に、三崎のビキニ被害の実情をラジオ番組で流すために関係者の声を録音することになり、二十二日、現地で録音することになった。三崎町側から草場林太郎町長、富沢福寿議長、漁業関係団体から丸生・寺本正市組合長、丸魚・久野又兵衛組合長、船員組合・浅井繁春執行委員長らが三崎町役場に集まったと二十二日の三崎港報は報じている。この日はNHKの到着が予定より大幅に遅れたらしい。

M・Sさんは、二十二日の日記に『浅井氏は、NHKの録音があるとかで、朝から午過ぎ迄役場で待ったそうだが待ちぼうけで帰ってくる』と記している。結局録音は午後行われたらしい。放送予定は二十四日午後四時から二十分間の予定だったという。

長野県のマグロ埋没事件の調査

ビキニ事件の発生当初、産地から送られたマグロが取引先で埋められてしまうという事件が各地で起きた。ビキニ事件発生前に三崎から送ったマグロが、事件発生とともに危険視されたのだ。また、事件後に送ったものでも現地の保健所が異常反応を示して、低レベルの放射能でも廃棄処分としてしまったのだ。

三崎のカネキチ商店が長野県に送ったマグロも現地で廃棄処分にされた。

このことを裏付ける資料として「かつおトまぐろNo.42」に『十九日（三月）長野県に出荷せるまぐろ埋没に関し東京本部に連絡抗議を依頼、調査員二名を現地に派遣す。』と記されている。

現地の調査に派遣されたのは、丸魚の現場責任者の鈴木順一さんと、三崎町水産課職員の島崎勉さんの二人である。

鈴木さんも、島崎さんも小諸から小海線に乗り換えて行ったことは覚えているが、下車した駅の名前などは忘れたという。埋めた現場の確認をして、代金支払いの交渉をしたがもらうことはできなかったという。二人は翌日、三崎に帰ってきた。

余談だが、二人は十九日午後三崎を発ったが、横須賀線の中で集団スリの犯行現場を目撃するというハプニングがあった。相手は多数だったし、怖くて何もいえなかったと島崎さんはいっている。

埋没事件に関して、三月二十四日の水産経済新聞のコラムに次のような記述がある。

『さきに三崎より長野県に販売されたマグロ類の放射能試験の調査結果が発表されたが、試験機械はポケット用の計量器で、針が動けば放射能があるとて、数字はいい加減なことが判明、その調査に当たった衛生員は三十ミリあったとか、ないとかでその衛生員が翌日から床についてしまったという

笑うに笑えないような話もあり…（以下略）』

このことから判断すると、産地から送られたマグロについて現地では現地での検査をしていたらしい。ところが「一〇〇カウント以上は廃棄」という基準が浸透せず、少しでも反応のあったものは処分してしまったらしい。

このことについて、カネキチ商店の出口惣太郎さんは「遠い日のふるさと・第九集」（平成六年三月三十一日発行）の中で、父親から聞いた話として次のように述べている。

『信州の佐久郡のマルタという商店へ送ったら、当時そこの保健所に、これは廃棄するから、という通達を貰って、埋めてしまったということで、三崎の鈴木さんが代表になって交渉してもらったのですが、やっぱり駄目だったよ、ということで三崎へ帰ってきました。送った金額としては、当時の約二十数万円だと覚えていますが、それが全部埋められてしまいました。』

三崎の魚商にとっては思いがけない損害だったが、これに似た事件はほかにもあったらしい。前出の「遠い日のふるさと・第九集」には山清商店の江尻清さんの談話も紹介されている。

『山清商店・江尻清さん＝検査合格の証明書を添えて取引先に出荷したのですが、しかし消費地ではいろいろな懸念があったことでしょう。廃棄されたマグロが結構あったと聞いています。私の取引先からも一部戻されてきて、やむなく私の所有地の山林に埋没したという記憶がかすかに残っています。』

また、丸魚の十周年記念誌「沿革」の中に次のような一文がある。

『（前略）「原爆鮪」として食べるどころか、鮪を並べた店に寄りつくのをおそれて魚価の暴落は勿

論、この事件と何の関係もなかったずっと前の魚まで悪名づけられて、せっかくわれわれが送った魚がトラック一台分消費地で土中に埋められるという悲惨な問題が随所で頻発した。』

丸生の組合史は次のように記している。

『(前略) 東京では五二四貫が販売中止となり、築地市場内の一隅に穴を掘って埋めたが、大阪、名古屋をはじめ、山梨、長野、富山、北海道など各地へ送られた分も同様廃棄処分に付された。』

当時、長野県にはかなりの魚商が、キハダ、メバチなどを送っていたという。こうした損害例はまだかなりあったものと思われる。

マグロ検査に立ち合った厚生省事務官の思い出

ビキニ事件が発生した当時、片倉敬剛 (としたけ) さん (横須賀市衣笠在住) は、厚生省検疫課横浜検疫所横須賀支所の事務官だった。当時はまだ、三崎に出張所がなかった時代だから、外地に立ち寄ったマグロ船は横須賀市の長浦港で検疫を受けなければならなかった。しかし、それでは船主も船員も、経済的にも肉体的にも負担が大きいので、なんとかかんとか理由をつけて「三崎に緊急入域」という形を取った。これだと、城ヶ島沖合で待機して検査官の来るのを待てばよい。検査が終われば直ちに水揚げができる。ビキニ事件が発生してからの検査はほとんどこの「緊急入域」を使ったようだ。だいたい、三崎に入港する船が三崎に緊急入域するというのも妙な話だが、当時は大まじめにこんな手段を取ったのである。

マグロ船が「緊急入域する」という連絡が入ると、横須賀支所の検査官は、タクシーで三崎に駆け

つけた。タクシー代は丸生が負担したという。深夜にきて朝帰るといったケースが多かった。事務官の片倉さんも一緒にかけつけた。検査結果を記録にとるためである。「緊急入域」が続くときは、泊まり込みになる。宿泊は岬陽館を使ったという。

城ヶ島沖に停泊しているマグロ船まで行き、ランダムに抽出したマグロにガイガーカウンターを当てて検査する。反応がなければ合格である。合格と決まった船は直ちに魚市場にいって水揚げを始める。水揚げ場に並べられたマグロは今度は一尾ずつ県の検査官の手で検査され、合格の証書が貼られる。

三崎で検査したときは反応がなかったのに東京に回航して検査を受けたら反応が出た、というケースもあったという。

片倉さんは毎日のように三崎にきていたので顔馴染みも増えた。

第十三光栄丸のときは他の人の担当だったので三崎には来ていない。このときは、ガイガーカウンターの故障などで検査が長引き、地元からも不満が続出したが、何故そうなったのか片倉さんにはわからないという。

片倉さんは三十四年九月まで横須賀支所で勤務、十月一日に横浜に転勤となった。現在は第一線を退いているが、ビキニ事件のことは長い検疫生活の中でも忘れられない思い出だという。

ガイガーカウンターの検査で、放射能が検出されたマグロ類は、海洋投棄と陸上投棄の二つに分けて捨てられた。海洋投棄の場合は捨てる場所があらかじめ決められていたが、陸上の場合はとくに規定はなかったため、三崎町全域にわたって埋められた。しかし、いつ、何処へ、だれが、何をどのくらい埋めたかについては、正式な記録は残っていない。

ただ一つだけ、埋め立てた場所と量をはっきりと示した新聞記事がある。四月二十四日の読売新聞の神奈川版に掲載された「原子サメヒレ埋没」という記事である。

『二十一日放射能検査の結果、サメのヒレ三十貫から三百九十四カウントを検知された三崎に停泊中の三重県所属十二号海王丸は二十三日同ヒレを三崎町じんあい（塵埃）焼却場構内に埋没処分した』

三崎町じんあい焼却場は、当時六合の市営火葬場の隣にあった施設である。このように、陸上での廃棄場所、廃棄量を明記した記事はこれだけだ。あとは廃棄作業に従事した人たちの記憶による証言だけである。

この証言から知り得た廃棄場所は、一番多いのが松輪入口から、現在の県合同庁舎にいたる谷戸地、道路一本を隔てた大宝院、小網代の高山、浜諸磯、通り矢、歌舞島、東岡町、海外町、宮川湾の奥などとなっている。

人知れぬ検知班の苦労

この事件で一番損な役割を負ったのがマグロの検査に当たる検知班だった。とにかくマグロ漁業絶頂期で勢いのある漁業者を相手に、しかもその本丸ともいうべき魚市場の中で、マグロにガイガーカ

ウンターを当て、放射能を検出すれば廃棄を命じなければならないのだ。当然その一挙一動に監視の目が集まる。四面楚歌の中での孤軍奮闘である。

検査は毎日続けられ、一日六万貫にものぼるマグロにカウンターを当て続ける仕事は決して楽ではない。しかもだれからも感謝されない仕事である。仕事はどのような体制でどのようにすすめられたのだろうか。その実情を、検査官サイドに焦点を当てて朝日新聞が四月二十七日の紙面で特集している。この中から主に三崎に関係した部分を抜き出してみた。

『検査員の数は一時はどこも地元の大学からの応援などで二十人近かったが、今は六人から十人ぐらい。厚生省、県衛生部員、保健所員などが二、三人ずつ常勤している。焼津では四、五日交替である。みな別に本務を持っているからこのままではその方に差支える。三崎では「少なくも廿五人ほしい。これを三班ぐらいに分けて交替制にしなければ参ってしまう」といい、清水は水揚検査と輸出検査の両方だから「他港の倍の苦労だ」と不平も出る。横浜では「せめてもう二人増やしてくれとかけ合ったが、予算の関係で断られた」と嘆いている。厚生省が検査官を引揚げ、検査の主体を県に移すとの話にヤッカイものを押しつけると憤慨しているところもある。

検査に使う費用もバカにならない。最も小規模な塩竈で二十万円かかっている。十八万円が人件費、二万円がゴム長を買ったりした雑費だ。宮城県の話では費用は本来厚生省が出すべきもので、県の明細書をもとにして予算化されるはずだが、足りない分は県の食品衛生費から出すことになるだろうと覚悟している。ところがこの程度では検査員の時間外手当などはひどくケチなものになるらしい。三崎では神奈川県が同県の係員に支払う三月分（十七日から月末まで）の超勤手当は一人七千円ほど、

厚生省が同省の技官に払った特別手当は一人当たりわずか四百円だったという。

過労や待遇の悪さ以上に検査員を嘆かせているのはいくら一生懸命やっても地元では「招かざる客」であることだ。検査のため水揚げ時間がかかると「大したこともないのにご大層な…」という不満が漁夫や市場関係者の間にありありと見える。もともと検査員は放射能にはシロウトだった。

厚生省派遣の技官といっても「科研で数時間の講習を受けて来た」程度、県や保健所の係官はこの技官の「弟子」だ。阿曽村厚生省乳肉衛生課長が第十三光栄丸のマグロの廃棄を通告した際も、三崎の対策本部には「乳や肉の課長に放射能の何が判るものか」との声も出たようだった。これは即成検査陣に対する不安の表現でもあった。』

三崎港報は十二月十一日の記事で次のように書いている。

『(前略)一日六万貫にものぼる水揚魚の一尾一尾にガイガーサーベーをあてて検印をつけ、或いは北はミッドウエー北方から南は豪州近海、東はアメリカ沿岸、西はインド洋と広範な操業海域の調査分類、さらにはまた放射能魚が少なければ少ないで過少評価され、多ければ保健所員が放射能まぐろを作るように怨まれ「こんな損な仕事はありません」と所員たちを嘆かせている。』

マグロは皆食べていた（秀丸食堂とその客たち）

ビキニ事件の発生と同時にマグロが売れなくなった。消費者が怖がってマグロを食べなくなってしまったからである。ところが事件発生前も後も、全く変わらずにマグロを食べ続けていた軍団がいる。

魚市場の裏にある秀丸食堂にやってくる客たちである。
秀丸食堂は昭和二十五年に開設されて以来、マグロを仕入れたことがない。この伝統は今も続いており、メニューにマグロの文字はない。ではここにはマグロはないのかというと、市内のどこの店よりもマグロが溢れている。何故か。お客がマグロを持参するのである。お客は市場の従業員、船員、魚商、その従業員たちである。
お客たちは自分でマグロを持ってきて、自分で調理する。お客が調理するための道具も揃っている。開設以来店を切り盛りしてきた大井トラさんは「ビキニ事件が起きて、マグロ離れが進んだときでも、ここのお客はマグロを食べるのを止めなかった。お客さんはしょうがない、しょうがないと話していたけれど、お客の数が減ったようなこともなかった」と証言している。お客たちは「食べて安全三崎のマグロ」を自ら証明してみせたのである。
しかし、一般市民や観光客などを対象とした食堂、料理屋、旅館ではこうはいかなかった。二、三ケ月は客足が減ったという。
秀丸食堂は今も当時と全く変わらないスタイルでの営業を続けている。

観光資源？になった第十三光栄丸

第十三光栄丸は三月二十八日、花暮岸壁を臨時の水揚げ場としてマグロを水揚げし検査を受けたが、この日は日曜日でもあり、お天気もよかったところから多数の観光客がやってきた。観光客は、新聞報道などでビキニ事件や第十三光栄丸のことをよく知っており、検査をする臨時の水揚げ場は大勢の

人だかりができたという。城ヶ島—油壷を結ぶ観光遊覧船は、臨時水揚げ場前で船をストップさせ、話題の十三光栄丸見学のサービスをしたと二十九日の神奈川新聞は次のように報じている。

『○…放射能云々の一部報道にあわてたのは多くの遊覧客だった。二十八日は藤沢小学校はじめ近県各地から「きのう買ったマグロは大丈夫か」とみやげ物の「安全保証」問合せが殺到、三崎観光会社は「大丈夫、大丈夫」と応答に汗だく。「観光シーズンを前にうまくねぇ」と関係者は渋い顔。

○…特設水揚げ場にならんだマグロは七百尾、恩田厚生技官がタッタ一台のガイガー計数管で丹念に調べはじめたのがきのう朝、夜になるも終わらず、はやる報道陣をおさえ「米国原子力委員会に資料を出すから…」とおちついたもの。

○…この水揚げ場は花暮岸壁の約三十坪、消防車一台が放水して清掃、船員も一人一人検査された。真剣な町民と、こわいものみたさの遊覧客の表情が妙な対照をつくっていた。

○…城ヶ島、油壷行の遊覧船が特設水揚げ場前で船をストップさせ話題の「光栄丸拝見」というサービス？ぶり。お客は喜んだがとんだ商魂とマユをひそめるむきもあった。』

検査の結果、全量廃棄と結論が出たのは、二十九日深夜になってからのことである。

研究材料になった汚染マグロ

放射能に汚染されたマグロは、土中に埋めるか、海に捨てるしかなく厄介者扱いされたが、その中で密かに研究材料として役に立っていたマグロがあった。

東京・築地に水揚げされたマグロ類のうち、汚染されたものの一部を、水産研究所、国立衛生研究

所が研究材料として引き取ったのだ。東京都衛生局の記録では、昭和二十九年三月十六日から十二月二十一日までに、放射能を検出したマグロ類は全部で三万一五七三・九貫、このうち、研究材料として提供されたのは一九〇五貫、このうち三崎のマグロ船が提供したのは一〇一・九貫となっている。その内訳は次の通りである。（月日は検知月日、提供量の単位は貫）

『月日	船名	魚種	提供量
4・26	11宝幸丸	シイラ	五
4・27	14丸高丸	カツオ	八
5・21	8順光丸	干サメヒレ	二〇
6・8	2全功丸	カジキ	三
7・15	11福生丸	キハダ	三六
8・5	3住吉丸	クロカワ	一七・八
10・4	10福生丸	クロカワ	一二・一』

マグロにも原子病？

七月十五日の水産経済新聞に興味のある記事が出ている。全身被爆したキハダが水揚げされたというのだ。

『このほど三崎に帰港した茨城県那珂湊港水高練習船鹿島丸（三五〇トン）の漁獲したサワラ、黄肌五十本から一〇五—三〇〇カウントの放射能が検出され廃棄処分にされた。同船は去る六月二日か

ら二十八日までビキニ東方五〇〇マイル、北緯一〇度—一二度、西経一七五度で操業、そこで漁獲したサワラ、黄肌の一部五十本に検出されたもの。特にこの五十本は頭から尾まで全体が被爆による火傷をおっており、ちょうど原子病にかかったのと同じような状態だったという。同漁場はバチの好漁場があり、今後出漁する漁船は注意を要するといっている。』

この記事の後、およそ一か月後の八月二十一日の神奈川新聞に「マグロにも原子病か」という見出しで、十八日に三崎港に入港、水揚げした第十二黒潮丸のマグロの記事が出ている。

第十二黒潮丸は、北緯一〇度、西経一七五度の地点で操業してきた。鹿島丸と全く同じ海域である。三崎魚市場に水揚げしたキハダなどのマグロ類からは、最高七三六〇カウントの放射能が検出された。マグロから検出された放射能としては三崎港最高の値である。このマグロは海中投棄された。

このことについて、二十一日の神奈川新聞は次のように報じている。

『(前略) 検査に当たった三崎保健所飯島放射能検知班長はつぎの点をあげて、これらのマグロが原子病患者に違いないと断定している。

①海が死の灰で汚染されているならば、船にも放射能が検出されるはずなのに第十二黒潮丸からは検出されていない。つまり検出された放射能は魚だけがもっている。②放射能を検知された魚は、どれもカウントが非常に高く、また洗っても減らない。原爆実験当時のものは洗えばカウントが減った。③カウントは肉も骨も魚体のほとんど全部から検出されている。これまでの例では汚染されたとみられる魚体の一部からしか検出されなかった。④しかし、人体と異なり、臨床的な症状はみられない。

おそらく実験中心地点で死の灰をかぶったものは死んだものと想像され、生き残りが、第十二黒潮丸の操業したビキニから五百カイリ離れた周辺を浮遊しているものであろう。』

第十二黒潮丸のマグロについては症状の説明がないので、鹿島丸と同一かどうかはわからないが、同じ海域で釣り上げてきたものだけに、その可能性は十分にある。当時、この海域がかなり汚染されていたことを裏付ける資料である。

三崎港での被災船は何隻だったのか

三崎港での被災船は何隻で、廃棄されたマグロ類の量はどのくらいだったのか。これまでに公表されている資料によると、隻数は最低一五一隻から最高一五九隻まで、廃棄量最低五万二五一四・三貫から、最高五万三二〇八貫まで諸説がある。これは、この資料を作成した機関、時期、立場、視点、基準などの相違によりバラつきが生じたものと思われる。したがって、どの資料が正しく、どの資料が間違いだと決めつけることはできない。どの資料もすべて正しいのである。しかし、これでは記録としてものを語るとき、混乱が生じるし、その都度、すべての資料を並べることもできない。三浦市として、どの資料を基準として使用するか、しかるべき機関で検討しておく必要があるだろう。

参考までに、入手し得た資料を紹介しておく。

資　料　名	廃棄隻数	廃棄量（貫）

『ビキニ水爆被災資料集　一五一隻　五二、五一四・三
神奈川県衛生年報29年度　一五三隻　五二、七八〇・〇
組合史（丸生）　一五九隻　五三、二〇八・〇』

多くの資料が、「百五十隻を超えるマグロ船が、五万貫を超えるマグロを廃棄した」と表現している理由がこれでわかる。（第五部資料　三崎港における月別廃棄隻数と廃棄量の項参照）

ビキニ事件で儲けた人もいた

ビキニ事件では多くの船主や魚商が損害を受けたが、この事件で儲けた人もいた。主にマグロをアメリカに向けて輸出していた人たちである。

当時、ビンチョウ、キハダなどがアメリカに向けて輸出されていた。ビキニ事件が起きてマグロ類の値段が暴落しても輸出向けのビンチョウは値段が下がらなかった。だからビンチョウ専門の漁船は損をしなかった。

ビンチョウにかぎらずマグロ類は、事件前も事件後もアメリカでは値崩れをしなかったという。日本とアメリカでは原爆に対する認識の度合いが全く違うのだ。広島、長崎で原爆の洗礼を受けている日本人は、原爆、放射能に敏感に反応するが、その恐ろしさを知らないアメリカでは反応は鈍い。ここに目を付けたのだ。日本から送られるマグロは検査済みのものだから大丈夫という安心感があったのかも知れない。

事件当時、第十一福生丸船長だった今津敏治さんは、事件が終息してから数年後に、東京で魚の仲買商をしている知人から「あのときは浜で叩いて、アメリカに送れば何倍も儲かった」という話を聞いた。三崎がその例外だったとは思えない。魚価が暴落してひどい目に遭った船員の立場からすれば、感情的には面白くない話だが、これも自由経済という社会の中では、当然のことかも知れないと思ったという。

ビンチョウが高値安定であることに目をつけ、ビンチョウ専門の漁場を狙った漁労長もいた。事件当時第一邦洋丸の漁労長をしていた大森徹さんは、自著「まぐろと共に四半世紀」の中でつぎのように書いている。

『この事件が特に印象に残っているのは、わが第一邦洋丸は、この魚価暴落の影響を、殆ど受けなかった数少ない船の一隻だったからである。と言うのはこの事件当時、三崎の鮪船操業海区は、東カロリンやマーシャルの、キハダ、メバチ漁場だったが、私はたまたま第10宝幸丸の経験から、汚染海域とは無縁の南緯漁場で、トンボを主体とした操業を行っていたため、一匹の汚染鮪も出さずに済んだのである。またその頃から漸く米国向けホワイトミート缶詰の輸出が活発になり、トンボは堅調な魚価を維持していたので、他船の最低保証をしり目に、魚価暴落のあおりを全く喰わずに済んだ。おまけに米国からの補償も均等割り分を頂戴したので、丸儲け的な形になって、なんだか申し訳ないような思いをしたものである。』

ビキニ事件の発生と同時に、主役の舞台に上がったのは寺本正市さんである。寺本さんは当時、事代漁業株式会社の社長であり、丸生の組合長であり、日鰹連の理事であり、三崎町の町会議員だった。事件発生とともに、対策三崎本部の本部長となった。それにもう一つ付け加えれば、事件の発端となった第五福龍丸の前身、第七事代丸の船主だった人である。

事件発生当時、寺本さんは間もなく六十四歳の誕生日を迎えようとしていた。当時としては高齢である。

丸生の組合長としてもかなり多忙だったが、対策本部の本部長という重責が加わった。それに日鰹連の理事としても補償問題などでは、第一線に立たなければならなかった。三崎―東京を往復する日々が続いた。

寺本本部長の市外での行動の一部が記録されている。この他に組合長として、町会議員として、事代漁業社長として、三崎地区内での動きも活発だったことを考え合わせると、寺本さんの多忙ぶりが伺える。昭和二十九年三月十七日事件発生と同時に水産庁に飛んでいるが、以降十二月二十七日までの、ビキニ事件に関した市外での動きについてのみ記してみる。(欠落した部分もあるので、全てではないことをお断りしておく。ビキニ事件以外の出張は省略)

月	日	内容	場所
3	17	水産庁へ事情説明	水産庁
3	18	原爆被災打ち合わせ	日鰹連

3	22	緊急組合長、協会長会議	日鰹連
3	23	日鰹連組合長会議	日鰹連
3	26	県議会に陳情	県　庁
3	29	融資の陳情	県　庁
3	31	国務大臣に陳情	国　会
4	3	国会へ陳情	国　会
4	16	マグロ試食会	参院議員会館
4	19	参院水産委員会で発言	国　会
4	21	日鰹連組合長会議	参院議員会館
4	22	政府に陳情	国　会
4	26	つなぎ資金融資問題	県　庁
5	11	補償要項説明会	水産庁
5	28	日鰹連、協会総会	参院議員会館
6	15	損害補償で水産庁と懇談	水産庁
6	16	特別融資で内山知事に要望	県　庁
6	18	補償問題で打合わせ	日鰹連
6	19	補償問題で打合わせ	日鰹連
6	23	岡崎外相と会談	外務大臣室

7	7	参院水産委員会傍聴	国　会
7	8	参院水産委員会傍聴	国　会
7	9	参院水産委員会傍聴	国　会
7	27	補償問題対策実行委員会	東京水産会館
7	28	総理府、外務省に陳情	国　会
7	31	参院水産常任委員会傍聴	国　会
8	9	参院水産常任委員会傍聴	国　会
8	10	衆院水産常任委員会傍聴	国　会
8	12	衆院水産常任委員会傍聴	国　会
8	23	日鰹連組合長会議	東京水産会館
9	11	融資問題で水産庁に陳情	水産庁
10	12	全国漁民大会	読売ホール
10	29	ビキニ補償合同会議	日鰹連?
11	26	原爆対策実行委員会	日鰹連?
12	24	対策実行委員常任委員会	日鰹連?
12	25	河野農相自宅訪問	東京・目黒
12	27	重光外相自宅訪問	東京

（この記録は、主に「かつおトまぐろ」「三崎港報」その他日刊紙などから抜き出したものである。

出張場所が複数にわたるものは、主要場所、もしくは最初の場所のみを記した）

久野又兵衛さんの奇跡

ビキニ事件発生当時、丸魚の組合長で、事件発生と同時に対策三崎本部の副本部長という要職にあった久野又兵衛さんは、昭和二十七年春ごろから著しい視力の低下に悩まされていた。立ち居振る舞いにはほとんど支障なかったが、会議などでは、テーブルの対面の人の顔の判別ができなかったようだし、書類などの文字が読めなくなっていた。このため毎朝女子職員に、新聞の切抜き、書類、書簡などを、一時間ほどかけて読み上げてもらった。この朗読を担当したのは当時入社したばかりの石渡豊子さんと石渡節子さんだが、石渡豊子さんは「新入りで、専門用語の読みや意味がわからず苦労した」と証言している。久野さんにとって朝の朗読が重要な情報源だった。視力が回復してからもこの朗読はしばらく続いたらしい。石渡節子さんは、自分の後輩たちが朗読を担当していたのを記憶している。

視力の低下はかなりの重症で、東大病院など十七カ所もの病院で治療を受けたが回復せず、医者から「両眼とも回復不能」と見放されていたという。

その久野さんが視力を回復するきっかけとなったのは交通事故だった。

昭和二十九年八月二十三日、三崎町議会の鮪対策委員会は、政府のビキニ被災の特別融資の割り当て額の問題で、県外船の割り当て額の増額を要請するため水産庁へ出かけた。久野さんも魚商の代表として参加した。

水産庁での陳情を終わって帰途、横須賀から乗ったタクシーが、初声村の和田でブレーキ故障から

停車中の三輪車とトラックの間に突っ込むという事故を起こした。この事故で久野さんは額に軽い怪我をした。タクシーには久野さんのほかに鮪対策委員の小菅喜久男（町会議員）、和田竹次郎（同）さん、それに助役の小川福松さんが乗っていたが、怪我をしたのは久野さんだけだったという。

結果的にはこの怪我が失明を免れるきっかけを作った。

このことについて丸魚の創立十周年記念誌「沿革」は次のように書いている。

『事件も終局に近づき、水産庁へ補償金の陳情に上京したその帰途、初声で交通事故にあい、顔面に負傷、これを治療してもらって自宅で静養していると、口に何かいままでと違ったものが出てきたので、早速医師にこの旨報告して精密検査を受けた結果、眼底に癌が出来ていたことが判明、事件の終結と共に臨時総会を開き一切を報告して始めてこの苦しみを明らかにし九月二十四日入院と共に手術を受け、ようやく視力を快復したということである。』

三崎で二つの講演会（賀川豊彦氏と武谷三男氏・中泉正徳氏）

ビキニ事件の最中の四月に、三崎で二つのビッグ講演会が開かれた。

〔その1・賀川豊彦さんの原子力講演会〕

キリスト教社会事業家として知られる賀川豊彦さんが、四月十二日、開設したばかりの二葉保育園で「原子力と宗教生活」というテーマで講演を行った。この講演は、日本キリスト教育県農村教団が主催した巡回講演会の一つとして行われたもので、三月九日から十四日までの日程で、県下八か所で

講演をした。
初代二葉保育園園長で日本基督教団三崎教会牧師の小沢一雄さん（ハワイ在住）が、賀川さんと知り合いだった関係もあって、開設記念のお祝いの意味を含めての講演会だったようだ。たまたまこの時期、ビキニ事件で三崎町民の原子力に対する関心が深かったときだけに、保育やキリスト教とは関係のない人たちが大勢保育園のホールに詰めかけた。
しかし賀川さんの話は、ビキニ事件とは直接関係なく「原子の構造」といった純粋な科学的な立場での話だったと、この講演会を聞きにいった亀田栄さんは話している。
この講演に関して小沢さんは「私は静岡県の出身なので、個人としては第五福龍丸事件には深い関心を持っていたが、講演についてはとくにビキニ事件を意識したわけではない。教会ができた記念の講演だったので、講演のテーマはなんでもいいとお願いしたと思う。一般の人たちが、ビキニ事件に深い関心を持っていたので、ビキニ事件のことを話すのではないかと期待したのかも知れない。参加人数は覚えていないが、ホールが一杯になったと思う」と、平成六年九月二十五日に行われた三崎教会創立四十周年記念集会に出席したときに、その当時の思い出を語った。
賀川さんは、この年（昭和二十九年）八月八日に結成された、原水爆禁止署名運動全国協議会の代表世話人の一人として名を連ねている。また、昭和三十年に広島で開かれた「第一回原水爆禁止世界大会」の日本側の代表準備委員の一人としても名を連ね、原水爆禁止運動に大きな貢献をしている。
※賀川豊彦（カガワ　トヨヒコ）一八八八―一九六〇　神戸市出身、キリスト教社会事業家として知られ、日本のキリスト教宣教活動に大きな影響を与えた。農業協同組合の活動にも大きな影響

を与えた。作家としても活躍した。（平凡社・世界大百科事典より）

〔その2・武谷三男さんと中泉正徳さんの放射能講演会〕

四月二十九日、町が主催して立大教授武谷三男さんと東大教授中泉正徳さんの講演会が城山会館で開かれた。

武谷三男さんは立大教授で原子核研究の権威、中泉さんは東大医学部の教授で、放射線科の専門家である。二人とも、原水爆については日本を代表する研究者である。

武谷さんは、三月十六日の読売新聞の報道のあと『降灰の具合と被害者の談話による光の強さからみて、原爆ではなくリチュウムを使った水爆ではないか』と喝破した人である。

中泉さんは三月十六日、読売新聞で第五福龍丸の特ダネ記事が報道されると、この日の午前十一時に東京都公衆衛生部長の要請で東京都庁に行き、他の専門家六人と対策を協議、翌十七日には、東大に作られた「第五福龍丸原爆被害状況調査団」の団長として焼津に飛び第五福龍丸の船体検査をした。また、乗組員の検査にも立ち会い、三月二十四日に専門家により結成された「原爆症調査研究協議会」のメンバーに選ばれ、臨床小委員会の委員長になった人である。

この二人の名前は当時のマスコミにしばしば登場していたので、町民の関心も深く、大勢の人が集まった。聴衆の一人として参加した松崎晋次郎さんは、会場は一杯になるほどだったと記憶しているが、人数まではわからない。会場の規模からいって二百人ぐらいは集まったのではないか。参加した市民の顔ぶれもいろいろで、船主、船員、魚商などの当事者はもとより、一般の町民も多数参加した。

松崎さんは質疑応答の中で船主の一人が、「ＤＤＴをかけたら放射能は消えるか」と質問したことを

覚えている。

この日の講演内容について五月一日の三崎港報はコラムの中で次のように書いている。（同紙の文中には「中原医博」と「中泉医博」と二つの名前が出てくるが、これは泉と原を間違えた単純なミスと思われる。）

『武谷理博の原爆および水爆に対する説明は実におそろしいものであり、これが戦争に利用されるならば人類の破滅も夢物語ではなく、尚今後もこの研究が続けられるという現段階にあることを示唆して警鐘し、中泉医博は、事件の鍵となった焼津漁港船第五福龍丸船員の病状や、船体に付着する放射能の経過が詳細に報告されて一般からの質疑にも応答、医学的から見た場合はこうだと教え、問題となっている放射能まぐろの基準については特に

（一）被害の妄想

（二）医学的

（三）行政上について

の三点を明確に説明されたのである。

即ち（一）はアメリカが缶詰一個に放射能を検出した場合、その品物全部を返還するということ。（二）の医学的に見る場合、第五福龍丸のまぐろ全部が埋没処分となったが、あのまぐろも魚体から皮をはげば食料にして差支えないと断定できること、或いはまた、一時間一・八ミリレントゲン以上の放射能を持っているものでも副食物として摂取した場合でも人体には害がない。（三）厚生省で百

カウント以上を廃棄処分にするよう示達しているが、これは人体に有害だというのではなく、従って危険視されるのは誤りである。ただ学理的な説明であって、人体に影響を及ぼすものでないと結論されたことが注目されるのである。

現在行われている百カウント以上の廃棄処分は、こうなると全く疑わしいもので、いままで業者が「そうですか」と納得せざるを得なかった処理機構に対して反省を求めたいのである。専門家の学理でさえ医学的立場と異にしているようで、われわれはこの食いちがいをはっきりさせなければならないと思う。』

四月の段階でこのような説が出されていたということは驚きである。しかし中泉さんの主張は行政の中に反映されなかった。それどころか、皮肉なことに、五月一日から厚生省が主管して行っていた放射能の監視体制が関係都県に委託され、神奈川県ではこの日「放射能関係漁船監視体制対策本部」を設けて監視体制の強化を図っている。

三崎魚市場で放射能測定器の展示会と講演会

十月十六日、三崎魚市場会議室で「放射能障害予防対策の講演と放射能測定器の展示会」が行われた。この展示会は多くの三崎町民が関心を寄せ見学にきたという。

十六日の三崎港報は、この模様を次のように報じている。

『きょう魚市場二階会議室で、水産経済新聞社主催、本社後援の放射能測定器の展示会が開かれた

が、放射能には最も深い関心を持つ三崎町だけに会場は早朝から大賑わい。三崎中学生約千人が先生に引率されて団体見学したほか、在港船員や主婦たちも姿を現し修学旅行中の他県学生も熱心に見学するなどなかなかの盛況だった。

なお午後一時からは同所で水産庁亘理課長、厚生省楠本部長ら中央有識者の放射能予防対策講演会が開かれた。』

三崎町民の俳句、短歌に見るビキニ事件

ビキニ事件では、町民俳人、歌人たちが作品を作っている。その中から、句集、歌集などで公表されたものを紹介する。

偶然にも、汚染マグロを検査する立場、廃棄と決まったマグロを処分する行政の立場、そして検査される側の立場と、三者三様の目で捕らえた作品が揃った。

俳　句

放射能ありと除けらる大鮪　坂野　無涯　（句集・春　潮）

ガイガー器音たて鮪漁夫黙す　坂野　無涯　（句集・春　潮）

坂野さんは当時の三崎保健所長で、マグロを検査する立場。その現場に立ち会ったときの作品である。

ガイガー探知器の音に一憂鮪漁夫　野上　飛雲　（句集・町と島）

水爆に汚れし鮪今日も埋む　　野上　飛雲（句集・町と島）
監視官乗せて鮪廃棄の船が出る　　野上　飛雲（句集・町と島）

野上さんは、当時の三崎町職員（のち市長）。町職員として魚市場に出向き、検査の現場に立ち会い、汚染と断定されたマグロを実際に埋めにいった体験を持つ。

短歌

放射能もてる鮪を埋めゐし狭き空地に雨そそぎをり　　由谷　一郎（昭和萬葉集巻十）
放射能残る鮪を捨てにゆく船葬送のごとく見送る　　由谷　一郎（歌集・砕氷塔）
放射能検査終りてべたべたと鮪の肌に印たたきをり　　由谷　一郎（歌集・砕氷塔）
昏みたる岸壁になほ技師らゐてガイガー計器を魚にあてをり　　由谷　一郎（歌集・砕氷塔）

由谷さんは、当時事代漁業株式会社に勤務していた。検査される側から捕らえた情景を歌い込んだ「放射能もてる鮪を埋めゐし…」は社会問題を扱った秀作として、昭和万葉集（講談社）の中に収録された。

由谷さんはこのほかに、直接三崎を歌ったものではないが、核実験に対する憤りを歌ったものとして、次のような作品を発表している。

何亡ぼさんたくらみなるぞ海中のビキニ環礁とどろき渡る　　由谷　一郎

（三崎短歌会二十九年六月月例歌会での作品）

北条湾春の日あまねしつながれて光栄丸は孤独なるかも　　東　丘一郎

（水爆に思う　昭和二十九年四月十五日三崎港報）

東さんは一町民の目で、検査結果を待つ第十三光栄丸の姿を歌った。このほかにも、水爆実験に対する憤りを歌った作品がある。

天下を揺るがせた事件にしては、表面に出た三崎町民による作品は少ない。俳句、短歌という世界では、ビキニ事件といった社会派の問題は、題材になりにくかったのかも知れない。このほかにも未発表作品はあると思うが、今回の調査では残念ながら入手できなかった。

三崎町小、中学生の作文に見るビキニ事件

神奈川新聞は八月七日の紙面で「こどもたちは叫んでいる　原爆をやめて！」というタイトルで、小中学生の作文を特集した。この中で三崎小一編、三崎中四編の作文が掲載されているので紹介する。この作文がどのような趣旨で書かれたかは明確ではないが、当時の少年、少女たちの目にビキニ事件がどの様に映っていたのかを知る貴重な資料なので、全文を紹介する。

『原子時代

三崎小学校六ノ四　　大沢　ひろこ

去る三月五日、アメリカがマーシャルぐん島のビキニかいいきで水ばく実験を行ったので、やいづの第五福りゅう丸が放しゃのうを受けてからは日本中に放しゃのう問題がおこったのでした。福りゅう丸では灰をかぶったので、船員にも、舟にもマグロにも放しゃ能がありました。三崎は漁港なのでよけい心配が大きいのです。そのさわぎの内は魚を水上げ出きないので市場は船でいっぱいでした。漁場で一月も二月も、魚をつって暮らしてきた船員さんは、早く家族に会いたいと思ってもけんさがすむまではおかへは上げてくれないのでした。ある日曜日、私はおじちゃんの舟をさがしに清美（いとこ）といっしょに魚市場へ行って見ました。市場に行くと足のふみ場もないほどマグロがあげてありました。そこらには魚をつつんだきれいとう紙やはらわたがちらかってほんとうにきたない所です。市場の中ほどまで行くと白衣を着た保健所の人や厚生省の人がいました。まぐろを入れるはこにその人達はすわっていました。そのそばに石油コンロのような形をしたガイガーけいすう機がおいてありました。この小さい機械一つでマグロをたべていいかきまるのです。放しゃ能があれば土の中にうめたり海に流してしまうのです。そしていくら調べてもみんな心配してマグロを買わないので、船員はさいていほしょうだと言って悲しんでいました。そしてすきなお酒もろくろくのまない人が多いと思うとほんとうにかわいそうに思いました。お母ちゃんはよそからおさしみをもらうと気味わるがって「すてるのはもったいないし犬に食べさせるのがいいね」とわらいます。そして近所の人とは、「当分お魚は食べないで野菜ばっかり食べてれば、安全で安くてえいようがあっていいわ」などというからお魚ずきの私は「お母ちゃん、野さいにも放しゃのうがあるよ」とおこると「いまのはじょうだん。本気にしたの」と言ってわらわれました。でもお母ちゃんはすきだったちくわやはんぺんは食べなく

なりました。私のお父さんは戦死しました。だから私は原子ばくだんや、すいそばくだんなどを使って戦争などすれば、おたがいにいやだからぜったいにやらないで、やりたかったら自分の国でやったらいいと思います。そしてすいそばくだんやげんしばくだんは平和に使ってもらいたいと思います。』

『原爆まぐろ

三崎中学校一年　浅水　忠

四月十六日の朝日新聞の夕刊にあった湯川博士の「原爆問題に私はうったえる」という記事や、十八日の毎日新聞の朝刊に出た湯川博士の大阪府会議事堂での講演の話を、お父さんから聞いて僕の心配はますます大きくなった。原子学者として世界的に有名な博士が「もうだまってはいられなくなった」といわれたのである。「原子力を悪用することは、人類をやがて破めつさせることになる」と世界にうったえられたのである。「人類が最初から原子力を平和的に利用していたら、世界には大なる進歩と幸福とが来ていたにちがいないのであるが、その原子力の強大な破かい力を自国の番犬として利用することはよろしくない。その場合には番犬ではなくて、いつ人をきずつけるかも知れない狂犬を飼っているのと同じことだ」といわれた。

このまま、原子爆弾の実験が続いて行われるとすると、放射能をふくんでいる灰が空高くまい上がり、風に吹かれて遠方に流れ地球上の各方面に降るようになり、地球上のあらゆる生物は、きっと悪いえいきょうを受けるにちがいないと思われる。そうなれば僕たちが住んでいる漁港三崎町の問題だけではなく、日本人全体の問題であり、もっと大きく言えば世界中の人類の大問題でもあると思う。

僕達日本人は、昔から日常の生活に必要な蛋白質を主に魚類からとっているのだ。一般の人々が魚

をこわがり食べないようになれば、日本の漁業がおとろえてしまう。四方を海でかこまれている日本は、世界中でも有名な水産業の国なのだ。そして日本中で必要とされるまぐろの半分以上のものが三崎の魚市場へ水揚げされているのである。だから、この頃のような「原子まぐろ」のさわぎが、もしも長く続くようであると、漁港三崎は大きな損害を受けるし、日本の国にとっては大変にこまったことが出来てくると考えられるのである。

人間の自由と、安心して生活して行く権利とを、どこの国より一番尊んでいるはずのアメリカがそしていつもいつも戦争をなくして世界を平和にしようと言っているアメリカが、どうして他国にめいわくをかけたり、漁業三崎町の人達を苦しめたりするような原爆の実験をするのか僕にはその気持ちがわからない。

日本中の人々の希望をいれて、世界各国の心ある人々の忠告にしたがって、ビキニ島で行われているような大がかりな、そして危険な実験は一日も早く中止してほしいものだと思う。そして少しの心配もなく、安心して、おいしいさしみやいろいろの魚の料理がたくさん食べられて、身体も丈夫に愉快に勉強が出来て、また楽しく遊べる平和な日が少しでも早く来るように僕は祈る。

いろいろ考えているとたまらなくなって、城ヶ島の灯台の上へでもかけ登り、アメリカの方へ向かって、出来るだけの大声で「原爆の実験はもう止めて下さーい」と叫んでみたいような気持ちにさえなるほどである。』

『「原子まぐろ」　　　　三崎中二年一組　広　川　礼　子

原子まぐろ原子まぐろと口ぐせのようにうわさされているこのごろを耳にしています。そのたび私

ははらはらします。

なぜなら私の父は遠洋漁業であるからです。まして父の船は原子まぐろが発見されてから四、五日ぐらいに入港の予定だったからです。もしや父の船に放射能があるのではないかと気がかりでなりませんでした。

父の船が十七時に入港すると、三月二十四日に電報が来ました。学校が終わるとすぐ市場にむかえに行きました。市場に行くと、真白な服を着て、たばのようなコードを持っている人、カバンに紙をはさんでなんだか記録係りのような人、ポータブルぐらいの大きさの箱を持っている人、かれこれ十二、三人くらいいました。きっと保健所の人達でしょう。

父の船が入港するというので放射能の検査に来たのでしょう。なんとなくいつもの喜びが放射能によってはね返されたような気がします。そしてどのくらいまったか灯台の方から電気をかんかんてらしながらだんだん港へ近づいて来ます。やっと港へ船が近づくか近づかないうちにコードをひいたり機械をそえつけたりしてもう放射能の検さです。船が港につくともう保健所の人達は船に乗りこんでいます。いっせいに船のまわりにあつまり、かたずをのんで見ていました。

少したったら、父が上がってきて「おう、むかえに来たのか」と日焼けしたかおをニコニコしていました。「お父さん、放射能なかった?」と私はとっさに聞いた。お父さんは「うんだいじょうぶ実験した所からいいかげんはなれていたから」といって、またいそがしげに船へ行ってしまいました。私はそれを聞いて背の重荷がおりたような感じがしました。まだ放射能があるかないか決定していなくてもそんなに心配するのに、実際原子病にかかった、放射能が船にあった人達の家の人々はどんな

にかなしんだことだろう。
　ただ三崎の町でも大変なそんがいです。いや三崎の町だけが漁業ではありません。日本は主として漁業の国です。日本だけのひがいはいかばかりか。水爆実験をするならば他国にめいわくのかからぬようじゅう分気をつけてもらいたい。今ちょっと新聞をひろげただけでも、大きなみだしで〃死の足音聞きつつ〃〃全員が放射能障害〃〃爪の色も紫に変る〃このみだしを見た私はこのような数人の人達のとうとい命をば、なくすということは、私たち日本人に対してはとても大きななげきといえましょう。元気で港を出ていってかえってくる人達が、放射能があるのではないか、という心配がこのごろの私達、漁しの子と生れその心配だけでもたくさんだとおもいます。この思いをそれほどまでに思ってはいません（アメリカの人々は）。なぜならこの間こんなことを耳にしました。「日本人は大げさだ。大きなことばかり言っているとさ」というおとなの人々の話をちょっと耳にしたのです。いくら薬でなおすといって、完全に病気がなおるまでの、心配がどれほどか……。もうこのように原子病がひどくなったら助からないとの話し……。
　父をなくした母子は、どんななげきでしょう。いくらないてもなききれないほどでございます。私はぜったいこの原子実験に目をそそぎ、よく判だんしてから原子実験をしてもらいたい。ただ実験だけですむものではありません。もちろん船の魚に放射能があるならば海の魚にだってあるはずです。この大きな事件に注目し、よく論議して下さい。これが何度かくりかえされたなら船はもちろん、魚をとる場所を失い、日ぼしになってしまいます。父もこんどは「方向を変えて、少し遠まわりをして行こう。そうすると往復七日のちがいか。油もそうとう使うし、魚もこうりがとけるからいたむなあ」

と一人ごとのように言っていました。
私はこの原子実験は絶対に反対です。この原子を少しもいい方へ使ってはいないではないか。原子機関車ができた、そういう口だけのことで実際には動いてはいません。ただ戦うほうの目的でつくっているように思います。この原子を発見したなら、もっと国民のため、世界のために利用してもらいたい。もしこの原子が戦う方へ目的されて作られいつか戦争がおこったなら、地球最後の日がくるのではないか。そうしたらもうえいきゅうに人類は生まれない。この大きな問題を私達国民はほうっておくことが出来ようか、考えただけでもおそろしい。』

『**水爆実験と私達の恐怖**

三崎中二年二組　木　村　妙　子

「またか」と思わずつぶやいて水を頭からぶっかけられたようにぶるっとふるえた。まったく毎日毎日、ラジオのニュースでも新聞でもビキニの水爆実験のことをいわない日はない。その都度私は泣きたいようなわめきたいような変な気になってくる。または「どうして実験をやったのだろう」とも考える。広島や長崎の原爆のことは映画で見たりしているのでうすうすわかっているが、今度の実験は原爆何百倍、何千倍も大きいのだと聞かされているだけ体験した人はまだ少ないのだ。いや体験などさせてもらいたくない。
私は考える。「水爆が戦争に使われたら」と…。それこそ地球最後の日も私達の目の前で見れるであろう。その情景が目の前にちらついて見える。「いやだいやだ」まるで気違いのように頭をかきむしる。がだめだ。今の私達はまるでライオンにねらわれた小羊かなにかのようにおびやかされている

のだ。
マグロと聞いただけでもいやーな気がする。たとえガイガー器で検査してあってもである。それほど水爆の実験に目を向けている私達だ。
人間とはおそろしい。人間の発明したものが人間を滅ぼすとは…。
私はこれも科学の発達であり、人間の頭の発達でもあるのだからしょうがないとも思う。しかし日本ではどうしようもないと言うではないか?
私はこの水爆を良い方へ使ってもらいたいと多くの科学者に願うのである。』

『三 崎 港

三崎中三年三組 片 寄 孝 男

ある日曜日。「ポー」と、汽笛と共に船が出て行くのを見た。
家族や友達の送るすがた、船員のおくられるすがたに、長い間海の上で「元気で働いてこいよ」「元気で働いてくるぞ」という気持ちが一本のテープにからんでいる。私は元気でまん船してくることを心からいのらずにはいられなかった。
船は漁場へ漁場へと向かっていってしまった。私が船をどこまでも見ている間に、あの黒だかりの人々が一人もいなくなり、海岸は一だんとさみしくなった。最近、原爆実験のため、第五福龍丸、また三崎では第十三光栄丸が、おそろしい被害を受け、そのためか三崎港は遠洋漁業だけでなしに、沿岸漁業又ひものまで売れないという、影響を受けている。
この間も観光客の中で五、六歳ぐらいの男の子が「お父ちゃん魚市場へ魚を見に行こうよ」とたの

んでいたが、おとうさんは「今はだめ。原爆びょうになるよ」といって向こうへ行ってしまったのを見た。

私はむりもないと思った。それは新聞でもつぎつぎに三崎へ入るうちの何そうかに、放射能のあることが報道されているからである。私には、三崎の漁業というものが、町の電灯が「パッ」と消えたように、思える。』

三崎中学校のビキニ事件調査

ビキニ事件の最中、三崎中学校が四月の初めに、生徒を通じて保護者に対し社会科の参考資料にするという名目でビキニ環礁の原爆実験についてのアンケートを行った。ところがこの調査が思想調査に当たるのではないかと一部PTAの間で取り上げられた。

この調査は原爆実験について①可否②関心の有無③被害を訴える方法の三点だったという。PTAが問題だとして取り上げたことについて、二十九年四月二十三日の神奈川新聞は次のように報じている。

『同調査は職業、年齢、性別を記入し、無記名となっているが、①と③項目はとくに世論調査としては政局の動揺期だけに、学校側の収集資料が特種団体に利用される心配があるとして学校の自重を要望する向きが強い。なお同校は、〃漁港三崎〃というテーマで全生徒に作文を書かせ〃原爆マグロ〃への関心の度合いを調査した。また三崎小学校も全校生徒に一せいに同よう趣旨で作文を書かせ、マ

グロ問題の参考データを取った。
高木中学校長の話＝三崎の人々の原爆の関心の程度を調査しただけで、別に日教組の指令を受けたということはない。あくまで学校独自の社会科の参考資料で強要した向きはない。自分としては問題ないと思う。
某ＰＴＡ父兄の話＝どうみてもこれは明らかに父兄の思想調査だ。生徒をつかってこうしたことをやるのは絶対に教員組合がなんらかの意図のもとに計画したとしかうけとれない。こんどのＰＴＡで問題にする。』
記事にはこのほか三人の談話が出ているがここでは省略する。
この報道があって間もなく、四月二十六日の三崎港報に「是か否か」という見出しで次のような投書が掲載された。
『三崎中学校で行った「原爆に対して父兄がどんな見解を持っているか」という社会調査が問題となって新聞紙に伝えられておりました。父兄として私の考え方を申上げ、皆様の批判を仰ぎたいと存じます。
三崎町はご存知のようにマグロによって町の経済を左右しております。それゆえ、漁業者はもとより、漁業に関係する家庭が全住民の大半と存じます。こんどの事件によって、全住民の受けました損害は非常に多いと思っております。

私のところは漁業をやっておりますす関係で、損害も非常に多く、貧弱な漁業者だけに一航海が直接影響しますので、町民の皆様が想像なさるより更に深刻でございます。数字的にこうだ、と申上げませんがこの苦境をどうして切りぬけるか、ただそれだけが私どもの考えでございます。たまたま学校でやりました実情調査のことでございますが、あれは私たちにとりましては大変いいことであり、三崎にふさわしい世論の調査と思っております。

中学校教育も、地方事情によりまして大変その趣を変えるわけでございますが、あの調査が伝えられますように或る一部の機関とのつながりを持つものならどうかと思われますが、学校自体が、社会科の資料として調べたのなら悪いものとは思いません。

三項のうち、最後の問題が多少どうかと思いましたが、大人の社会へ求めるものとすれば別に気にとめる必要はないと存じます。ただ子供たちを通じてしたことがとがめられるのですが、これとて別に問題ではないと存じます。この頃日教組が一般から敬遠されているように思われますが、組合自体を直接こうだと攻めるのは的外れのように考えられます。と申しますことは組合はあくまで純然たるものであって、その構成分子の一部のうちに或いは思想的にどうかと思われるものがあるのではないでしょうか。物事すべて最初から疑っては何ごとも完成しないでしょう。もっと大らかな気持ちで解釈したらどうでしょうか。原爆のおそろしさは誰彼の別はありません。そのおそろしさは国民あげて取りのける責任を持っていると思います。漁業者である私は特にこのような考えを根強く持っております。これはいけないことでしょうか。

四月二十四日（一主婦）』

その後、このことについての新聞報道はない。当時の校長の高木留吉さんはすでに故人である。教頭の榊原清之介さんはこのことを記憶していない。調査結果についてもそのデータは残っていない。一般町民がビキニ事件をどう捕らえていたかを知る上では貴重な資料だが残念である。

三崎中学校の演劇「原爆の子」

三崎中学校では、二十九年五月十五日、新生座(当時の宮城にあった映画館、現在の三崎コスモ会館)で学芸会を開いたが、この中で二年生が劇「原爆の子」を上演した。

この劇は広島大の長田新教授が、広島での被爆児の体験談をまとめたドキュメントが原作で、昭和二十七年に近代映画協会が第一回作品として制作、乙羽信子、宇野重吉らが出演して多くの人に感動を与えた。これを、三崎中教諭の大久保澄雄さんが生徒向けに書きなおして上演したものである。

演出、指導に当たった大久保さんは「ビキニ事件を意識したわけではない」というが、ビキニ事件騒ぎの真っ最中だっただけに、「人ごとではない」という思いが観客の共感を呼んだらしい。観客の多くは、マグロ漁船員の妻や母たちであった。この劇に出演した坂野(現小島)晁子さんは、観客が泣いていたのを記憶している。

三崎下町の景気

ビキニ事件の発生で、漁業関係者や、漁船員が大きな打撃を受けたが、三崎下町の景気はどうだっ

たのだろうか。

三月二十九日の朝日新聞は次のように伝えている。

『(前略) 被害は漁業関係者だけに止まらなかった。漁船が遠洋漁業に出かけるには、油、エサ、漁具、氷、食糧等を港の各業者から代金後払いで仕込んでゆくのが普通で、船員たちも帰港後に返す約束で、作業支度を整え、シコウ品などを仕入れてゆく。漁業者の損害はこれら業者にシワよせされ、漁業者の出した手形は不渡りになる。ある船具店では三十万円の手形の決済が約六十日後の次の航海後に繰延べられた。料理屋、飲食店、飲み屋など軒並みに火の消えたよう。

魚の水揚げが遅れるので港に船もどんどんたまる。遠洋漁船は普通五日ないし一週間くらいで、また漁場へと向かうのだが、十六日以後に入った四十隻近い船が二十八日までにわずか二、三隻しか出港していない。船が遊んでいるための損害まで入れるとどのくらいになることかと対策本部では暗然としている。金はない、船は出ない、船員たちは「仕様がねえ、パチンコでも…」というのでここだけは大はやりだ。』(以下略)

折角入港しても、先に入港した船が溜まっていて水揚げできないという現象が続いた。検査の結果放射能は検出されなかったが、水揚げができないために鮮度が落ち、やむなく全量棄てたという悲運に見舞われた船もあった。このため、三崎の下町は確かに不景気になったが、一時的なものでそれほど時間の長いものではなかった。

「市民の歩みを記録する会」がまとめた「遠い日のふるさと―思い出三浦―第九集」が、平成六年三月三十一日に発行された。この号では「ビキニマグロ事件当時と私」という特集を組んでいるが、この特集では、料理飲食店関係者、魚商らが、被害の状況を語っている。この話から三崎下町の景気がどのようなものだったかある程度推測できる。その主なものを紹介しよう。

さくらや・櫻井祐準さん（料理店）『マグロが放射能で汚染されたということで、敬遠されているのがすぐわかりましたので、仕入れを止めました。この時期しばらく三ケ月くらいだったでしょうか、お客様が少なくなりました。この辺を境にして、マグロ船の宴会が出港のときだけになりました。そのうち、漁場によって汚染されているものと汚染されていないものがあるのがわかったり、国から安全だという発表があったりしました。原爆の実験をしたところのマグロでなければいい訳です。半年くらいたってやっと活況を取り戻しました。それから鮪漁業はもう一度盛んになりました。』

岬陽館・中野正博さん（旅館業）『経済的にそれほど豊かでなかったため、割合ひまな時期でした。お客様は水産業と関係のある方が多くよそからくる観光客は少なかったですね。料理にマグロの刺身を出すと「このマグロは放射能マグロじゃないのか。大丈夫か？」などといわれましたが、特に被害というほどのものはありませんでした。』

三崎館支店・渡邊キヨさん（旅館業）『この事件が起きると、マグロの放射能を調べるため、ガイガーカウンター測定器を持った保健所関係の方々がきて騒ぎになりました。うちでは特別被害というほどのものはありませんでした。でも一カ月くらいお客様が少なかったでしょうか。皆さん割合平気

でマグロを食べられたような気がします。』

咲の家・三壁政太郎さん（料理店）『あの騒ぎが起きても、お客様はそれほど減らず、大して影響なかったような気がします。マグロのほかに使うものがいろいろありました。また、当時のマグロは遠洋も近海も冷凍ではなく生で、近くの銚子や金華山沖などで獲れたものがありましたから、それを使い、「いま値の下がっている時期にたくさん食べて下さい」とお客さんに勧めました。』

山十商店・三壁勝さん（魚問屋）『横浜でもマグロについては、ほとんどストップ状態で、原価を割って半分くらいで売りました。売らなきゃ仕様がないと毎日毎日苦労しました。消費者の方も不安がっていました。三崎町で発行した「食べて安全　三崎のマグロ」という大きなステッカーを横浜のそこいらじゅうに貼りました。一ケ月ほどたった頃でしょうか、だんだん消費者も安全だと判断し、回復してきました。』

丸松食品株式会社・青木恒夫さん（食品加工業）『売れるかどうかわかりませんでしたのでコマギレにして在庫でとっておきました。廃棄処分なんて時代でしたので、私どもでは夜を徹してやりました。いつ金になるかはわからない、という心配がありました。在庫はふえるし、経済的、金融的に困りました。』

魚栄商店・亀田信一さん（魚小売店）『旅館や寿司屋に卸していたのですが、マグロは全く駄目でした。知らない人ほど神経過敏で、いくら説明しても聞いてもらえませんでした。観光客もそんなに来る時代ではなかったですから、他からの客も三崎では静かでした。』

村松商店・村松善一さん（魚加工業）『廃棄されたものはありませんでしたが、ビキニマグロとい

う市民感情からでしょう、不安がられ、動揺も手伝って、値引きを余儀なくされました。ガイガー検査を通ったものを使って加工したのですから決して悪いものではないと説明しても、希望値段で売ってはもらえませんでした。幾らでも仕様がないという委託値段にされて、泣いた覚えがあります。私どもは廃棄ということがなかったので、まだ被害は少なかったと思います。』

こうした被害が出た反面、降ってわいたビキニ事件のために連日徹夜をしなければならないほど忙しくなった業種があった。印刷所である。対策三崎本部などの団体が発注するチラシなどの印刷物が大量に出たのだ。突然に、しかも大至急という仕事だ。この忙しさを裏付ける資料として鮪漁業研究会が発行した「鮪漁業No.7（昭和二十九年三月号）の編集後記に次のような記述がある。

『水爆パンフレットで印刷所が超満員、而も記事が増加して58頁にもなりました。そんな理由で第7号が大変おくれて申訳ありません。』

「鮪漁業」は当時三崎の清水印刷所で印刷していた。大至急の注文で、印刷所が大忙しだったことを裏付ける貴重な記述である。そのあおりで、定期刊行物だった「鮪漁業」の発行が遅れてしまったのだ。

三崎港報社工場長の吉田芳夫さんは、ビキニ関係の印刷物のため、連日深夜まで残業が続いたことを記憶している。

当時三崎では清水印刷所、三崎港報社の二軒しか印刷所がなく、しかも多量の印刷物を短時間で刷りあげる能力を持っていなかったので、徹夜騒ぎとなった。一度に何十万部という単位のものは対策本部が東京で刷ったのだという。